

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

東田

豊橋校区史

8

Azumada







豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ 東 田



大口公園の梅園



校区の西を流れる牟呂用水



整備された朝倉川の護岸



競輪場南ゲート



今も続く三八の朝市



市の中心に伸びる県道多米街道



校区を南北に通る青陵街道



二連木城跡の梅園



マンション・アパートが
立ち並ぶ中心街



東雲商店街



静かな仁連木の住宅街



臨濟寺 本堂



臨濟寺 吉田城主小笠原家墓標



太蓮寺 山門



東田神明宮



太蓮寺 十王魔王像



太蓮寺 十王堂



藁御園遺跡の石柱



臨濟寺 宗徧庭



二連木城の跡



二連木城主の守り神古城稲荷



全久院



今も残る二連木城の土壁



区画整理後のモダンな建物



当時を偲ばせる東田遊園の建物



区画整理後の現代的な住宅街



昭和保育園



今も残る西前山町の移転前の
東田小学校の擁壁



恵日幼稚園



桜丘学園創設者満田樹吉・
オリガ夫妻の胸像



大正末期から昭和初期にかけての
商業高校のアルバムより



現在の市立豊橋高等学校

ノーベル物理学賞受賞の
小柴昌俊先生の来校を記念
し作成された夢の卵



現在の東田小学校



伝説が残るおゆみ橋



東田校区市民館



仁連木老人福祉センター

発刊によせて



平成18年度
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業に素晴らしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度
東田校区総代会長

阿 部 富 治

市制100祭記念として「校区のあゆみ」を発刊することになりました。わたしたちの住んでいる街には、南北に通る青陵街道、東西には市電が通る多米街道があり、交通の要衝になっています。東田には有史以来人が住み、歴史を秘めた多くの史跡や文化財があります。校区の北には朝倉川が流れ、自然にも恵まれた落ち着いた住宅地になっています。

東田小学校は、幾度か校名が変わりましたが、ノーベル物理学賞を受賞された小柴昌俊先生をはじめ大きな足跡を残した人物を輩出してきました。東田の過去をひもとくと、自然や歴史、教育、住民の生活と意識など今日まで変わることなく受け継がれていることに気づきます。

この冊子には、先人が残された記録を基に昔の東田の人々の生活や史跡の一端がまとめられています。これからも人と人が交わり、地域を愛し協調し合って、激動する社会情勢にも賢明に対処していく人々の共同体として東田校区が一層の発展・向上することを願うものです。

最後に、この冊子を編集するにあたり、日夜ご尽力を賜りました編集者、ならびに資料提供に協力いただきました方々に、心よりお礼を申し上げます。

目次

CONTENTS

第1章 自然と環境

- 1 東田校区の様子 7
 - (1) 校区の位置と土地の様子 7
 - (2) 校区の気候と風土 8
 - (3) 校区の人口 9
- 2 町の様子と交通 10
 - (1) 市電通り（県道多米街道） 10
 - (2) 県道青陵街道 10
 - (3) 東雲商店街 10
 - (4) 住宅街
（仁連木町から東田町にかけて） 11
 - (5) 昔懐かしい朝市 三八通り 11

第2章 歴史と生活

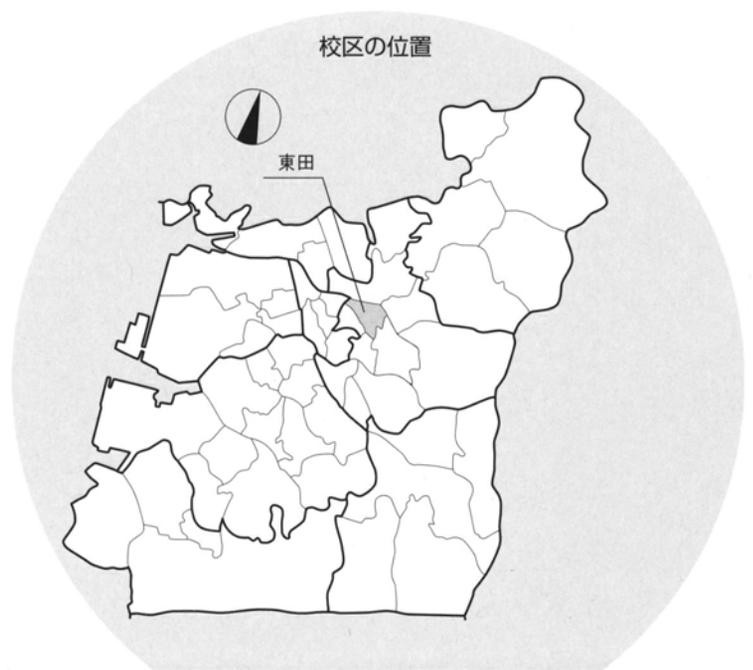
- 1 原始から古墳時代の頃の東田 12
- 2 古代から中世の頃の東田 13
 - (1) 東田神明宮 13
 - (2) 二連木城と戸田氏 13
- 3 近世の頃の東田 16
 - (1) 仁連木村と臨濟寺 16
 - (2) 定助郷の仁連木村 17
- 4 明治・大正の東田 18
 - (1) 町村合併と町名変更 18
 - (2) 遊郭の移転 札木町・上伝馬町
から瓦町・東田地区へ 20
 - (3) 市電の開通 22
- 5 昭和・平成の東田 24
 - (1) 町の発展と東田校区の土地区画整理事業 24
 - ① 東田土地区画整理事業
（昭和2年～17年） 24
 - ② 仁連木土地区画整理事業
（昭和8年～21年） 25
 - ③ 他の地域の土地区画整理事業 26
 - (2) 東田球場・陸上競技場から競輪場へ 26
 - (3) 朝倉川改修工事 28

第3章 教育と文化

- 1 教育の充実と発展 29
 - (1) 慈善事業の地として
～豊橋育児院～ 29
 - (2) 東郷町にあった女子教育の拠点
～豊橋実践女学校～ 29

- (3) さまよえる市立豊橋高等学校
～独立校までの険しい道のり～ 30
- (4) 地元の要望に応じて
～豊橋市立商業学校～ 31
- 2 幼稚園・保育園、小学校教育 35
 - (1) 東田幼稚園（旧豊橋幼稚園） 35
 - (2) 双葉保育園 35
 - (3) 恵日幼稚園 35
 - (4) 昭和保育園 36
 - (5) 東田小学校 36
 - ① 第7番小学 田尻学校の時代 36
 - ② 西前山町に学校があった時代 37
 - ③ 戦後の苦難の時代 38
 - ④ 現在地の東田小学校 40
- 3 社会教育の充実 41
 - (1) 仁連木老人福祉センター 41
 - (2) 東田校区市民館 41
- 4 史跡と寺社にまつわる人物・伝承 41
 - (1) 薑御園（東田神明宮） 41
 - (2) 太蓮寺 41
 - (3) 二連木城と戸田氏・大口喜六 42
 - (4) 全久院と戸田宗光 43
 - (5) 臨濟寺と小笠原家・山田宗偏 43
 - (6) 伝承や伝説 44
 - ① おゆみ橋 44
 - ② 仏泥棒 45
 - ③ 竜の鱗 46

- 年表（東田校区・市） 47
- 編集後記 50



第1章 自然と環境

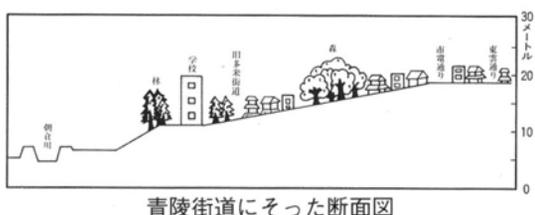
1 東田校区の様子

(1) 校区の位置と土地の様子

東田校区は、市の中心部から東に上がったところにある。全体が平地になっていて、ほとんどが住宅地で、ところどころに畑が見える。家並みが市の中心部から東の赤石山系へと密集しながら続いている。校区の北側には、朝倉川が東から西へ流れている。この朝倉川の河岸段丘上の対岸には、桜丘高等学校や桜丘中学校が見える。

さらに、北西に目をやれば、朝倉川が合流する豊川の流れも見える。また、校区の西端を牟呂用水が南へと流れている。

私たちの東田校区は、東西およそ2km、南北およそ1kmの細長い形をしている。校区の真ん中を市電が西から東へと走っている。また、豊橋東部の重要な道路の多米街道と青陵街道と呼ばれる県道が、市電駅の東田坂上近くで東西南北に交わっており、朝夕は大変混雑している。校区の北東の一角には、豊橋競輪場、東田球場があり、その近くには老人福祉センター、二連木城跡などもある。



青陵街道にそった断面図

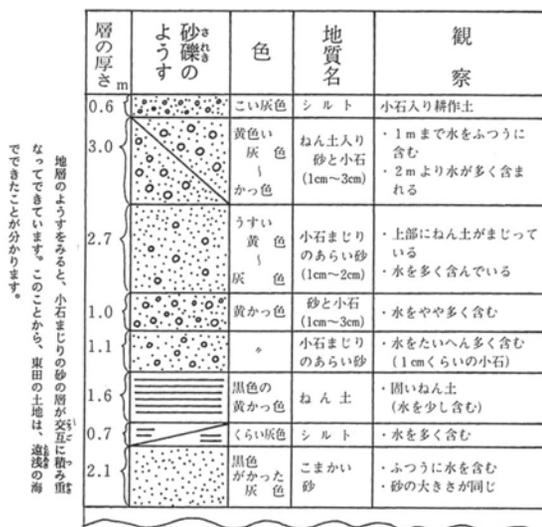
市電通り周辺やその南の東雲通りには、多くの商店街があり、商店街を取り囲むように住宅が密集している。中心から西にかけて、

全久院、東田神明宮、臨濟寺、太蓮寺などの歴史ある社寺が見られる。

朝倉川から青陵街道に沿った線で左下の図のように切ってみると、一番高いところは、市電通りの南側の東雲町や吾妻町で、海拔約20mの高さである。

市電通りを中央にして東を向いて立ったとき、北側にある仁連木町、上地町、東田町などは、朝倉川の河岸段丘上の土地で、北に行くほど低くなっていることがわかる。

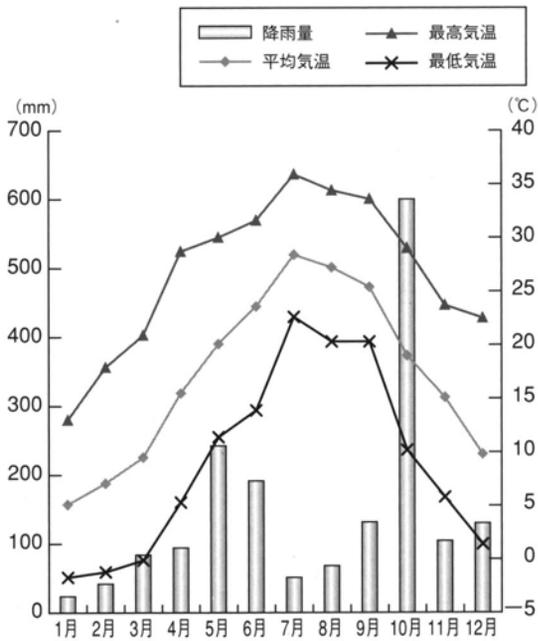
この朝倉川の河岸段丘は、新生代第4紀(今から1万~180万年位前)の洪積台地といわれ、浅い海のところにできた地層が、地殻変動で押し上げられ陸地になったところである。東田小学校の校舎を建てる時、ボーリング調査で、地下の土地の様子を調べた結果、地下5mまでは、粘土質の砂礫層、その下は5mおき位に固い粘土層になっていた。



東田小学校の地下の様子

(2) 校区の気候と風土

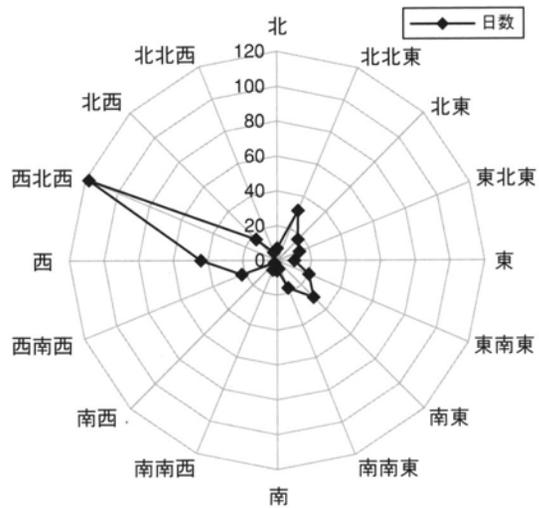
豊橋中消防署の観測データによると、平成16年の平均気温は17.2度で、年間降雨量は約1,760mmである。中消防署と東田校区が距離的に近いことから、東田校区もほぼ同様の結果と考えられる。この気象データから、温暖な校区であることがわかる。下の観測データのグラフから、5月・6月と9月・10月の台風時期にまとまった雨が降ることや、夏季と冬季の雨量が少ないこともよくわかる。特に近年は、梅雨時の雨量の減少で、夏場の渇水が心配されている。



平成16年豊橋市の気温と降雨量の変化
(平成16年中消防署の観測データ)

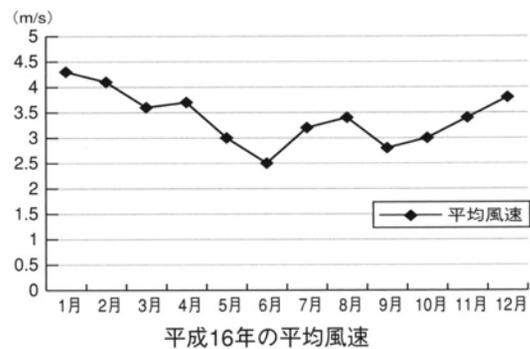
右上の風向日数のグラフからは、1年の半分近くは西北西の風が吹き、特に冬は寒気団による空っ風が強く、気温のわりには寒く感じる。しかし、年間の平均風速は、秒速3.4mで穏やかな土地であることが分かる。

東田校区は、6月から9月にかけて南寄りの風となり、最高気温も30度を超す。太平洋からの湿った空気が押し寄せてくるため、湿度が高くなり、いっそう蒸し暑く感じる日が続く。



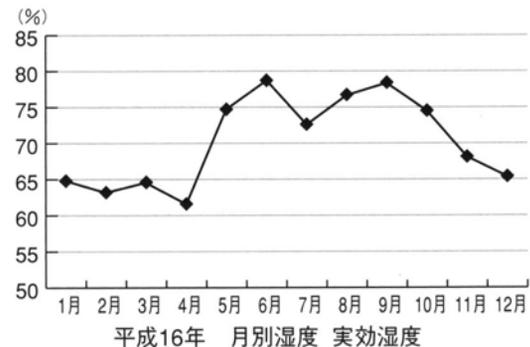
平成16年 年間風向日数

校区では、主に南東の風が吹くと雨になり、西の風になると、天気が良くなることが多い。夏から秋にかけては、台風の通り道になることもある。昭和41年(1966)10月の集中豪雨では、朝倉川が氾濫し、川沿いの人たちは大きな被害を受けた。



平成16年の平均風速

12月から3月の冬場は、風が一番強い時期で、北西からの強い風が吹く。そして、空気も乾燥し、よく晴れた日が続く。



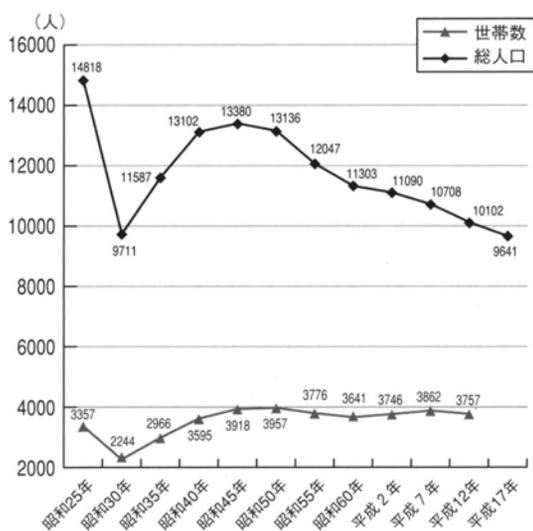
平成16年 月別湿度 実効湿度

最低気温が氷点下になる1・2月には、氷がはることもあるが、雪は舞う程度で、めったに積もることはない。

(3) 校区の人口

下のグラフは東田小学校校区の人口・世帯数の変化である。昭和25年（1950）の頃の人口がずいぶん多いように見えるが、東田小学校校区が最大の時であり、今の校区とはその面積や含まれる町がずいぶん異なっていたからである。昭和30年（1955）の調査で激減しているのは、当時の東田小学校のマンモス化に伴い、昭和27年に旭小学校が独立分離され、現在にほぼ近い校区となったからである。

旭小学校分離後の東田校区では、昭和30年頃までは、農業を中心としていたため、人口も今のように多くなかった。昭和30年から昭和45年までの人口の増加は、昭和30年代からの区画整理や市電の延長工事終了に伴うものである。交通の便もよくなったため、次第に家が立ち並び、また宅地が整備され、他の地域からの流入人口がどんどん増え、豊橋の住宅地として発展してきたことがわかる。

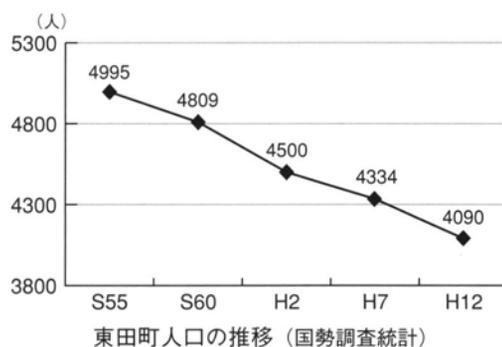


東田小学校校区の人口・世帯数（豊橋市小学校区別統計）

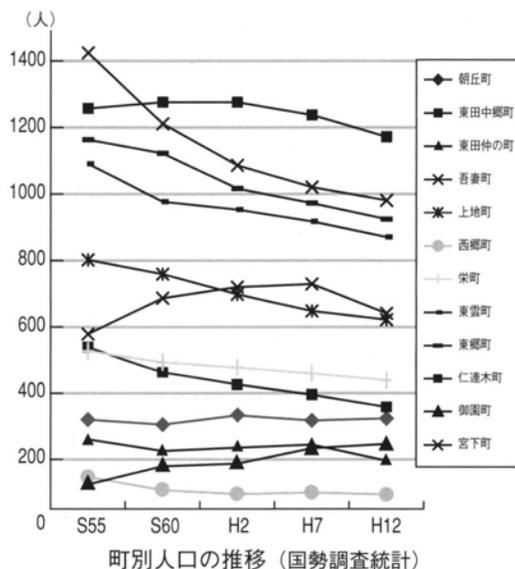
国勢調査をもとに、昭和55年以降の各町別の人口の推移を調べてみると、次のグラフの

ようになる。区画整理事業が昭和21年（1946）に終了した東田町や仁連木町などの人口が減少していているのは、新しい世代が他の地域へと移り住んだからであろう。

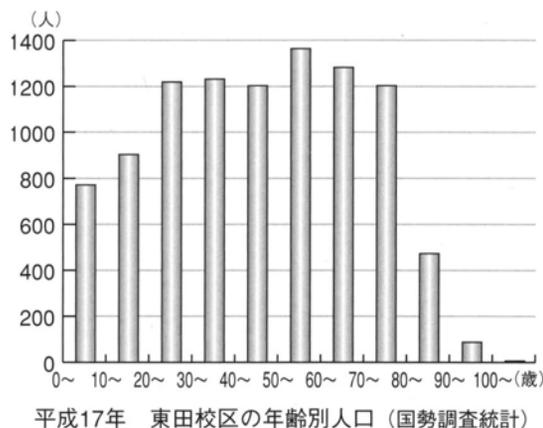
また、平成17年度の年齢別人口からは、今後も高齢化が進むとともに、人口が少しずつ減っていくことが推測される。



東田町人口の推移（国勢調査統計）



町別人口の推移（国勢調査統計）



平成17年 東田校区の年齢別人口（国勢調査統計）

2 町の様子と交通

(1) 市電通り (県道多米街道)

校区を東西に走る県道多米街道は、別名市電通りと呼ばれている。市電通りは、道幅も広く、終日たくさんの車が通っている。特に朝夕は、市内へ通勤・帰宅する人たちの車で、大変混雑する。

「東田坂上」から「井原」の市電通りの両側に沿って、いろいろな商店が立ち並んでいる。これらの店の多くは、昭和35年(1960)に東雲通りを走っていた市電の路線変更に伴い、発展してきた商店街である。市電通の両側には、80軒ぐらいの商店があり、食料品や日用雑貨、美容院・米屋・写真屋・靴屋などいろいろな種類のお店がある。しかし、まだ車社会ではない時代にできた店舗のためか、駐車スペースがなかったり、狭かったりする商店が多い。最近になり、広い駐車場を備えた本屋や信用金庫の支店などができてきたが、店を閉めるところもある。



県道多米街道東方の眺め

(2) 県道青陵街道

校区の西側を南北に走る片側2車線の道路が豊橋と新城を結ぶ青陵街道である。朝から夕方までに一万台以上の車が行き来し、なかでも石や土を積んだダンプカーがよく通る。

また、昭和36年4月には、当時の青陵中学



青陵街道 みかん並木の表示

は記念碑があり、昭和43年にテレビで全国に紹介されたことと、詩人のサトウ・ハチロー氏から寄せられた「きいろがきいろが輝きになる」の詩が書かれた看板がある。

(3) 東雲商店街

多米街道と平行に、東雲町から吾妻町にかけて立ち並ぶ商店街を東雲商店街と言う。大正14年(1925)の市電開通をきっかけに次第に店が増



東雲通りの商店街

え、商店街に発展した。昭和35年(1960)に、東雲通りの市電が廃線となるまで、停留場「本社前」(現:スギ薬局)や終点の「東田」(現:東京堂薬局)で乗り降りする人も多く、東雲商店街もにぎわっていた。

米屋さんの話

僕が小さい頃は、東雲通りに市電が通り、レールにいたずらをして遊んだ。その頃はまだ東雲通りに店があまりなく、空き地もあった。だんだん店も増え、賑わってきた。そして戦争。戦争で焼け残った東雲商店街だが、物のない時代で、僕の家は米の配給所隣、大勢の人が配給札と米を引き換えに来た。そして、現在の米屋になった。以前からのおなじみさんからの電話注文が多く、配達を中心としているが、スーパーへの注文も減った。建物も古く改築したいのだが、いろいろと難しい。

今は昔ほどの活気はみられないが、通りの両側には東雲発展会の看板や花飾り・街路灯が付けられ、華やかさを出している。

昼や夕方になると、地元や近隣の校区の買い物客が多く、普段着で気軽に買いに来ている人をよく見かける。また、近所の顔見知りの常連客が多く、店の前には自転車や車が止めてある風景を見かける。

東雲商店街にはいろいろな商店がある。米屋、八百屋、魚屋、肉屋、クリーニング屋、電気屋、洋品店など、商店の種類が多く、日常生活に必要なものはほとんど売っている。商店の規模はあまり大きくなく、家族だけでやっている店がほとんどである。中には、三代続いている店が10軒ほどある。



東雲通りに今も残る銭湯

最近では、広い駐車場をもつドラッグストアやコンビニエンスストアもできたが、これまで続いていた店を閉めるところもある。

(4) 住宅街 仁連木町から東田町にかけて

青陵街道とほぼ直角に交わる朝倉川の南側の少し高いところには、たくさんの住宅やマンション、アパートが建っている。土地は北に傾斜しており、南に行くほどだんだん高くなっている。40年ぐらい前からどんどん家が建ち、今では住宅地に変わってしまった。また、近くに競輪場があり、

駐車場が不足した時期に、仁連木町や東田町の所々の空き地を駐車



仁連木町のモダンなマンション

場として使ったため、いっとき畑をほとんど見かけなくなった。

しかし最近になり、競輪場の来場者の減少に伴い、この土地が持ち主に返されたため、畑になったり、空き地になったりしている。

(5) 昔懐かしい朝市 三八通り

校区の西側、東田町西郷を東西に分けるように三八通りが通っている。市電の駅「前畑」と「東田坂上」の中間の北側に位置するこの通りは、現在では市内5箇所ではしか開かれていない珍しい朝市が立つ通りである。

三八市はその名の通り、3と8のつく日に開催される地元密着の市である。この市の起源は定かでないが、戦前から開かれている。太平洋戦争中は、物も少なく一時中断されたが、終戦後は闇市として栄えたそうである。

昭和24年(1949)、業者(組合員)と農家(臨時組合員)の二百数十人で「豊橋街商組合」を作り、その後「豊橋日商協同組合」と名称を変え、現在の三八市を支える母体となっている。しかし、世の中の変化と、店を出していた人たちの高齢化にともない、今では40軒ばかりの出店となっている。

季節に合った新鮮な野菜や果物、花などが店頭並び、近隣の常連客を喜ばしてはいるが、住宅の密集化や交通事情など多くの問題を抱え、今の場所での存続が心配されている。



賑わう年末の三八の市

第2章 歴史と生活

1 原始から古墳時代の頃の東田

今から約1万2千年前、最後の氷河期が終わって、気候も温暖となり、人々の生活も大きく変化した。この頃から2千4百年前頃まで続いたのが、縄文時代である。校区では、縄文時代の遺跡が発見されていない。しかし、朝倉川対岸の牛川校区南部や西小鷹野では、縄文時代の遺跡が発掘されていることから、この校区にも人が住んでいた可能性は十分ある。

狩りや漁に頼る時代が数千年続いた後、大陸より米作りが伝わり、弥生時代となる。この時代になると、人々は米作りに適した低地に住むようになった。東田校区で発掘された弥生時代の遺跡としては、東田神明宮から東田小学校運動場西半分にあたる東郷遺跡や小

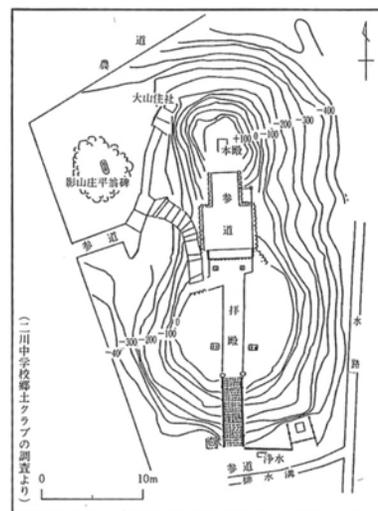
学校の北西方向、朝倉川河岸から二連木城周辺にかけての仁連木遺跡がある。

朝倉川のたもとにある東田神明宮の西隣りに、小さな森があり、御嶽社が建っている。そこが東田古墳である。この時代の古墳は、川沿いに集中しており、豊川流域には、300基、校区を流れる朝倉川流域からは、40基ほどの古墳（古墳時代後期から終末期）が確認されている。東田古墳は、東三河地方の中でも大きなものの一つで、古墳時代中期の前方後円墳である。かなりの勢力を持っていた豪族の墓の証として、鏡が見つかった市内でも数少ない古墳である。鏡は、大和朝廷との結びつきを示す祭器であり、権威のシンボルであった。

東田古墳は、南北40m、後円の直径は20m、高さ3mである。古墳からは、歴史的価値が高いと評価された鳥文鏡のほかにも、円筒埴輪や形象埴輪、直刀も発見されている。



豊橋地方の古墳群の図
(豊橋市史)



東田古墳見取り図
(二川中学校郷土クラブの調査)

の本丸をはじめ、本丸北には蔵屋敷、本丸東には二の丸、さらに二の丸を取り囲むように東曲輪があり、それぞれ土塁と堀（空堀）で隔てられていた。総面積は、約1,500坪（4,950㎡）で、現在、本丸跡は、大口公園になり、二の丸の跡地には、老人福祉センターが建てられている。

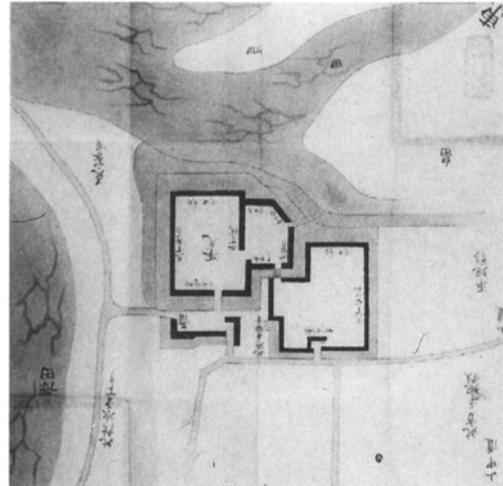
戸田宗光の仁連木への進出をもう少し詳しく述べることにする。戸田宗光の出身については、諸説あつてははっきりしないが、応仁の乱(1467)以前、碧海郡上野荘（豊田市上郷）に住んでいたことは確かで、そこの荘官を勤めていた。宗光が戦功をたて存在を示したのが、寛正6年(1465)、額田郡井口村（岡崎市井ノ口）で起きた丸山大庭の乱を平定したためと言われている。

応仁の乱の始まった頃、宗光は、一色直義の所領であつた

知多半島と渥美半島の獲得にのりだし、文明8年(1476)には、知多半島の三河湾側半分を手に入れた。渥美半島へ入つたのは、その前年であり、大津（豊橋市老津町）に住居を構えた。その後、文明10年(1478)前後に田原に移り、それまでの郡代一色七郎を大草（田原市大草町）へ隠居同様の形で追いやつたが、詳しいことは不明である。

田原に本居を構えた宗光は、蔵王山のふも

とで汐川の近くの巴江（田原市殿町）の平山に築城（現田原城跡）し、ここを根拠地として東三河の有力な戦国武将に成長していくことになる。



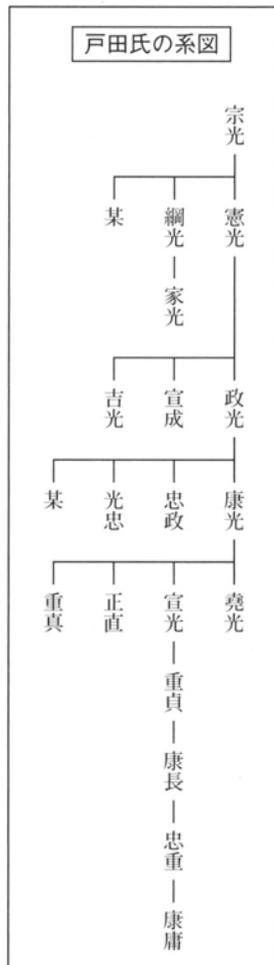
二連木城略図（豊橋の史跡と文化財）

戸田氏の勢力が順調に伸びた背景には、遠江へ勢力を広げた駿河（静岡県東部）の今川義忠の支援があつたという。ところが、文明8年(1476)義忠が戦死し、当時八歳の氏親（うじちか）が後を継ぐにあたり、今川氏の家臣間に内紛が発生した。宗光は、これを今川氏から離れる絶好の機会ととらえ行動を起こした。

明応2年(1493)宗光は仁連木（二連木）に築城し、北方進出を図る足場とした。田原を子の憲光に任せ、自らは二連木城に移り住んで、三河と遠江の国境船形山（豊橋市雲谷）に築かれていた今川氏の砦に対抗する構えをみせた。

この仁連木の地は、先にも触れたが伊勢神宮領の薑御園であつたが、築城に伴い、当然のごとく戸田氏の支配下に置かれた。

明応8年(1499)、戸田宗光は戦略上の要地船形山城を遠江の諏訪信濃守と組んで攻め落とした。しかし、それもつかの間で、今川方の朝比奈泰以に逆襲され、兩人とも討ち取られてしまった。こうして合戦に敗れた戸田



氏は田原に退き、子の憲光が後を継ぐことになった。

この頃、戸田氏に対抗して一色城主（豊川市牛久保）となった牧野古白は、当面の策として、今川氏に従いつつ勢力の確保に努める道を選んだ。永正2年（1505）、牧野古白は、今川氏親の指示により、今橋城（吉田城）を築城した。これは、当時西三河で勢力を伸ば



今も残る二連木城跡の土塁

してきた松平氏に備えてのものである。

田原に退いた憲光は、今川氏に対立することを不利

と考え、再び今川氏に従うとともに、二連木城を修理して、子の政光に守らせた。戸田氏のこうした動きにより、豊橋地方は今川氏に従属するものの、牧野氏と戸田氏が相対し、両立を許さない不安定な状況下に置かれることになった。

豊橋周辺を支配下におさめた今川氏親は、

永正3年（1506）8月、今橋の牧野古白、一色の牧野成勝、二連木の戸田政光など東三河の諸将を含め、一万余



木立の中の石碑

りの兵を従えて西三河へ侵攻した。しかし、松平氏の強い抵抗を受け苦戦したうえ、田原の戸田憲光に背後を襲われる恐れもあると判断し、今川氏は急に兵を引き上げ、駿河（静岡県中部）にもどってしまった。

ところが、同年9月松平長親が数千の兵を率いて、今橋城に攻め込んできた。牧野古白は懸命に防戦に努めたが、11月、ついに力尽き自害した。これには、今川氏親が今橋城を

攻撃したという異説もあり、定かでない。古白討ち死にの後の今橋城についても、戸田憲光の二男宣成が守ったという説と、しばらく空城になっていたとの説がある。

二連木城、今橋城（吉田城）をめぐる戦い

1493年	戸田宗光	二連木城を築く
1500年	戸田宗光	船形山合戦で戦死
1505年	牧野古白	今橋城を築く
1506年	今川氏親	今橋城を奪う 牧野古白戦死
1514年	戸田憲光	全久院を建てる
1518年	牧野成三	今橋城を奪う
1529年	松平清康	今橋城を奪う
1537年	戸田宣成	今橋城を奪う
1541年	戸田宣光	二連木城を修築する
1546年	今川義元	今橋城を奪う
1564年	徳川家康	今橋城を奪う
1571年	武田信玄	今橋城、二連木城を攻撃
1575年	武田勝頼	蘆ヶ原（はじかみがはら）の戦い
1590年	池田輝政	吉田城主となる

しかし、知多郡に逃げていた古白の子成三・信成により永正15年（1518）の頃、今橋城は奪い返され、戸田氏は二連木城も手放し、大崎へと移った。

その後、東三河は西三河の松平長親の孫にあたる清康の支配下に置かれ、仁連木の豪族らに従った。松平氏の支配はしばらく続いたが、天文6年（1537）、再び戸田康光が吉田城（今橋城）を攻め、牧野成敏を追い出し、大崎城主であった戸田宣成に城を守らせた。同年10月、康光は二連木城を修築し、二男の宣光を移して、豊橋市域のほとんどを支配下におさめた。

戸田氏が東三河の安定した勢力に見えたのもつかの間で、天文15年（1546）、今川義元は家臣の天野景貫に吉田城の攻撃を命じた。今川勢は、夜明けとともに龍拈寺方面から総攻撃をかけ、その日のうちに吉田城を攻め落とした。この時、二連木城の戸田宣光は、どのような動きをしたのかは不明であるが、なぜか吉田城落城後も今川方に属して健在であった。

今川義元の吉田城占領により東三河の情勢はしばらくの落ち着きを取り戻したが、西三河では織田信秀の岡崎侵入の気配が濃厚となり、松平広忠は不安をつのらせていた。天文16年（1547）広忠は、今川義元に援軍を求め、その代償として先妻との子竹千代（後の家康）を人質として差し出すことにした。ところが、駿河に送る途中の竹千代を戸田氏が奪い、織田氏に渡してしまった。当然のごとく今川義元は激怒し、直ちに吉田城にいた天野景貫に命じて、田原城を攻撃させた。田原城は落ち、田原戸田氏は滅亡した。しかし、二連木城の戸田氏は、本家との関係を絶ち、存続した。ここに戸田氏一流の世を生き抜く術を感じることができる。

こうして、今川氏がしばらく東三河全域を手中に治めたのである。

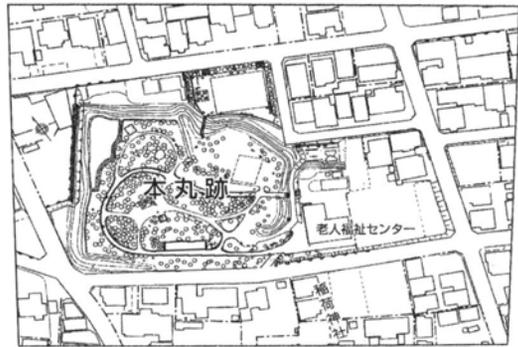
しかし、永禄3年（1560）の桶狭間の戦いで、今川義元が亡くなったことをきっかけに、それまで動勢をうかがって徳川元康が、今川氏と絶縁するという意味で名を家康と改め、吉田城を攻撃してきた。牛久保の牧野氏も二連木城の戸田氏もすでに家康に内通していたといわれている。兵糧攻めにあった吉田城は、永禄8年（1565）城を明け渡したと伝えられている。

元亀2年（1571）に入ると武田信玄の動きが活発となり、大軍を率いて三河に侵攻してきた。信玄の侵攻に備えて家康は吉田城に入城しており、二連木城は酒井忠次に守らせていた。武田勢の攻撃は二連木城から始まり、圧倒的な勢力を前に忠次も守りきれず、城を捨てて吉田城にこもった。こうして、二連木城の存在は、歴史上から消えたのである。



大口元市長直筆の石碑

また、天正2年（1574）5月、武田勝頼の三河侵入の時も、仁連木を中心とした戦があった。これが「薑ヶ原の戦い」で、その後「野田・長篠の戦い」へと移っていったと伝えられている。



二連木城跡の現在の様子

戦国時代には、各大名は勢力を伸ばすために、ある時は敵同士だったものが手を結んだり、また離れたりとといったことを繰り返していた。その舞台が、仁連木であり今橋である。

戦国時代の終わり、天正18年（1590）徳川家康は、豊臣秀吉の命令により、関東に移った。その時、戸田氏（康長）も武蔵国深谷一万石の城主になった。そして、吉田城主池田輝政によって、二連木城は廃城となった。



稲荷社

3 近世の頃の東田

(1) 仁連木村と臨濟寺

この時代の仁連木村は、現在よりはるかに広く、次の地図のような範囲であった。

幕府の収入は、農民の納める年貢によって成り立っていた。そのため、領主は、士農工商の厳しい身分制度や五人組の制度などにより、農民支配に力を入れた。

当時の東田仁連木村は、吉田藩領や臨濟寺などの寺社領に分割されていた。三河国渥美郡の二十八か村の一つで、米の取れ高は、八百八十八石、家の数は百十戸、人口は六百五十七人であった。これが、今から二百年前の江戸時代の仁連木村の様子である。

吉田城の第7代城主小笠原忠知が、正保2年（1645）、豊後杵築（大分県）から吉田四万五千石に移ってきた。この小笠原氏は、室町時代に武家の礼式である「小笠原流」を制定したことで有名な家柄で、徳川氏に仕えて幕府の礼式をつかさどる立場にあった。

東海道筋の要地吉田への小笠原氏の転封は、当時としては異例の抜擢であった。小笠原忠知は、吉田城主として治世にあたる一方、日光参詣奉行、鳳来寺山東照宮造営などの大役を務めあげた人物である。忠知は、寛文2年（1662）、当時まったくの原野であった東部の



小笠原家代々の墓

河原町（瓦町）の開発に着手した。この開発を願い出たのが、仁連木村の佐藤弥八郎である。

小笠原氏は代々信仰が篤く、領内のいくつかの寺社を保護している。その中でも、小笠原長矩は、忠知が没したその際、菩提寺として飽海村（豊橋市飽海町）にあった宗玄寺を同4年、仁連木村（東田町字西郷）に移し、



臨濟寺 山門



江戸時代の仁連木村 「字一筆限地図帳」より

寺号を萬年山臨濟寺と改め、寺の造営・修復に力を注いだ。そして、忠知はじめ4代自筆の經典を臨濟寺に奉納した。臨濟寺の仁連木村への移転に伴い、先の佐藤弥八郎が申し出た、河原町の開発計画が許可された。

臨濟寺には、茶道宗徧流の祖である山田宗徧造築の「枯山水」の庭園や茶事に関する自作の道具も多く、宗徧作と銘打った茶杓・花入・茶碗などすぐれた茶道具を残している。なかでも、花入「黒塚」は特に有名である。

宗徧などの文化人が吉田に来たことをきっかけにして、茶の湯が広まり、武士階級や僧侶・神官が地域文化の担い手になっていった。

そして、この時代以降、商人や富農などを中心に、庶民にも様々な文化が広がっていった。



宗徧庭の竹林

(2) 定助郷の仁連木村

江戸時代の交通路（東海道）の要所として賑わった吉田宿であるが、時代とともに交通量は増加し、人馬の需要が多くなった。

吉田宿で負担しきれない不足分は、近隣の村々に助郷という形で転化され、宿場の人々だけでなく、農民たちを疲弊させていった。吉田宿の助郷として指定された村は、享保10年（1725）には、渥美郡や八名郡、宝飯郡の36か村であった。仁連木村は、人馬不足の補充を常時義務付けられた定助郷であった。仁連木村の助郷高は、36か村中二番目に多く、助郷高で人馬の割当がされた。そのため、助郷によって村々が受けた打撃ははなはだしく、農村は困窮した。第一に、参勤交代の時期が春や秋の農繁期に重なることである。第二に、馬は老馬であってはならず、人足は15歳以上60歳以下に決められており、農家の中心的な働き手を出さねばならなかった。さらに、助郷村には、川除普請・橋場普請などもしばしばあって、これらの課役がいかに重かったかが想像される。

区分	享保8年	宝暦10年	安政5年
宿人足	15,791	24,435	27,971
助郷人足	768	16,513	47,267
合計	16,559	40,948	75,267

吉田宿継立人足数の変化（豊橋市史）

幕末になると、特に黒船来航以降の政治情勢の混乱により交通量が激増し、宿場や助郷の負担は極限に達した。

明治5年（1872）、問屋場（伝馬所）と助郷およびこれに関する一切の課役が廃止され、助郷制度はようやく消滅した。

4 明治・大正の東田

(1) 町村合併と町名変更

武士の時代が終わり、日本は明治政府を中心とした近代国家へと歩みだした。これまでの藩領については、姫路藩が版籍奉還を申請したことをきっかけに、全国に広がった。吉

田藩も明治2年（1869）2月23日に版籍奉還を願い出た。その後、明治4年（1871）7月14日、廃藩置県が断行され、豊橋藩は豊橋県といったんになったが、その後同年11月には額田県に所属した。しかし、わずか一年余りで額田県は愛知県に合併され、ほぼ現在と同様の愛知県が成立した。

明治14年（1881）3月の東田村誌をみると、三河国渥美郡東田村とある。そこに書かれていることをまとめると次のようになる。

三河国渥美郡東田村

東田村は、古くは渥美郡の姜郷に属し、承和（848）の頃に仁連木村とっていた。明治九年三月に、瓦町村と合併した際に、名前を東田村に改めた。

東には岩田村、西には豊橋村、南には豊橋村・三輪村・岩田村の三村と接し、北は三河国八名郡多米村・牛川村の二村と朝倉川の中央を境にしていた。

幅員は、東西貳拾七町五尺（約2,950m）南北壹拾九町貳間三尺（約2,100m）である。
〔豊橋市史〕より、現代語にした<抜粋>

今日の豊橋市の町名から当時を推測すると、現在よりもかなり広い地域が東田村に含まれていたことがわかる。



明治時代の東田村23字（豊橋市史）

明治の始めの頃、民家は、西郷・東郷の辺りにある程度で、その他にはほとんどなかった。現在の競輪場周辺は雑木林で、小山や谷があり、ところどころに湿地が広がっていた。村民の職業は、ほとんどが農業で、朝倉川に

沿った低地には田が広がり、河岸段丘上の土地は、畑として利用されていた。

明治11年の新検反別によると東田村の土地の様子は次のようになっている。

土地の様子 新検反別	
田	五拾五町五反九畝十五歩
畑	九拾五町七反壹畝廿九歩
宅地	拾壹町九反七畝拾四歩
林	拾四町貳反二畝廿叁歩
野	四畝拾六歩
藪	四町六反拾七畝歩
萱生	三反拾八歩
草生	壹町貳反三畝三歩
稲干場	壹町七反四畝廿九歩
総計	壹百八拾五町五反壹畝廿五歩
面積単位	
1町	約10,000㎡ (約100a)
1段(反)	約1,000㎡ (約10a)
1畝	約100㎡ (約1a)
1坪(歩)	約3.3㎡
(豊橋市史)	

明治12年(1879)の東田村の物産としては、次のような作物が、製造物としては実綿があがっている。

東田村の物産	
米	六百九十三石六斗六升
麦	三十七石七斗八升
粟(あわ)	百九十三石六斗四升
黍(きび)	十四石壹斗三升
稗(ひえ)	五十四石八斗五升
大豆	百三拾石壹斗五升
蕎麦(そば)	五石八斗四升
里芋	十壹石五升
甘薯(さつまいも)	十万貳千百廿壹斤
大根	四万八百三十斤
実綿	七千二百七十七斤
	一石…180 ^{ソル} 一斗…18 ^{ソル}
	一升…1.8 ^{ソル} 一斤…600 ^{ゾラ}
(豊橋市史)	

このように、明治時代の農家のおもな作物は、米をはじめとした穀類が中心であることがわかる。現在のように機械はなく、牛や馬を使って田畑を起し、その多くは人の力に頼った作業であったことは言うまでもない。また、明治9年(1876)1月1日の東田村の



当時の東田村の想像図(あずまだ)

人口と面積を合わせて考えると、未開墾の地を多く有していたことが容易に想像できる。

明治9年の人口調査	
本籍	貳百七拾六戸(276戸)
内 士族	五戸
平民	貳百六拾壹戸(261戸)
社	四戸(郷社一座 村社一座 格外社二座)
寺	六戸(臨在宗二寺 曹洞宗一寺 浄土宗二寺 真言宗一寺)
人数	総計1186口(人)
男	604口
内 士族	8口
平民	596口
女	582口
内 士族	6口
平民	576口
(豊橋市史)	

これらの戸数と人数から当時の一世帯の人数は4.3人となり、現在の東田校区の一世帯あたりの人数2.48人とは、ずいぶんかけ離れた家族構成であったこともわかる。

また、村誌には、村の南の方には東海道が通り、村の西の方には本坂街道が通っていたとある。さらに、村の中央には太田街道と呼ばれる多米に通じる道があったとある。現在、この太田街道の一部が、豊橋商工信用組合東田支店のあたりから東に延びる多米街道と、道幅こそ違うがほぼ一致する。また、市の中心へ向かう西方は、同地点から斜めに、前山町の旧東田小学校と臨濟寺との間を通り、餌指橋へ通じる細い道がこの街道の一部である。

明治21年(1888)には、村の西を流れている牟呂用水が完成した。当時のことを知る朝河勇治氏は、次のように懐かしんでいる。

牟呂用水と朝倉川（朝河勇治氏の話）

私の父（明治八年生まれ）は、牟呂用水を作るとき、働きに行き、掘った土をモッコで運んだそうです。一杯運ぶと確か二銭といていたと思います。

朝倉川は水がきれいで、魚がたくさんいました。竹みやうげなどを使って、もちこやはやよ、にがひらなどをとりました。取った魚は、煮たり焼いたりして、晩のおかずにしたものです。

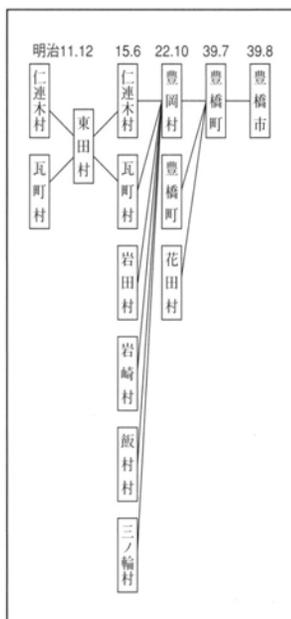
牟呂用水でも魚が取れました。女の人は洗濯をしたり、野菜を洗ったりしていました。ダーダー橋では、農作業で汗をかいた後、川の水をシャワー代わりに使っていました。



明治中頃 通称ダーダー橋

東田村の時代は短く、明治15年（1882）には、再び東田村が仁連木村と瓦町村とに分村している。明治22年（1889）には、仁連木村・瓦町村・岩崎村・岩田村・飯村村・三ノ輪村の六村が合併して、第11組（役場名）豊岡村となった。

明治39年（1906）、豊橋町は、花田村・豊岡村と合併して、豊橋市となった。



（2）遊郭の移転

札木町・上传馬町から瓦町・東田地区へ

豊橋における遊郭の歴史は、すでに江戸時代の東海道吉田宿の頃より、宿駅の中でもとても有名になっていた。宿駅には、旅籠屋を設けることが許可されており、ここに飯盛女を置いていたのである。その場所が現在の札木町と上传馬町であり、この両地での繁昌は、維新以降の明治43年（1910）の東田遊郭移転完了まで続いたのである。

芸娼妓および貸座敷に関する諸規則は、幾度となく改廃を重ねた。同33年に内務省令第44号で「娼妓取締規則」が発せられると、愛知県では「席貸茶屋及娼妓取締規則」を廃して、「娼妓取締規則施行細則」および「貸座敷取締規則」を定めた。これにより、娼妓の保護、遊郭の取締りを行い、従来の席貸茶屋は貸座敷と改称され、その営業も指定地域内に制限された。



なお、娼妓の年齢制限についても、明治14年（1881）には、13歳未

満の者は娼妓として許可されなかったが、同17年（1884）にはこれを14才未満とし、30歳以上の者には、娼妓家業を許可しなかった。また同27年（1894）には、従来の14歳未満を16歳未満に引き上げ、同33年（1900）にはさらに18歳にまで引き上げられた。

豊橋では、同33年の規則により、札木・上传馬が営業の指定地域に定められた。その後同40年（1907）に「貸座敷取締規則」が改正され、瓦町および東田地区がその指定地域に改められ、貸座敷業者は、同43年（1910）8月31日を限りに、新指定地域の東田遊郭に移転することになった。

遊郭は、明治初年から活発化してきた自由廃娼運動をも退け、近世封建制度によって培われた伝統的な社会意識のもとで公然と存続していた。しかし、豊橋の遊郭が存続したもう一つの理由として、歩兵第十八聯隊の設置と第十五師団誘致による兵士の激増があげられる。少なくとも、これら多数の軍隊関係者がいなかったとすれば、吉田宿以降の遊郭は、以前にも増して繁栄を続けることはできなかつたと推察される。

区分		名古屋	豊橋	岡崎	県内	岐阜県	三重県	静岡県	他県	合計
芸妓	札木	25	5	1	2	2	2	1		38
	上传馬	16	5	4	5	1				31
	計	41	10	5	7	3	2	1	0	69
娼妓	札木	21	8	3	6		4	4	1	47
	上传馬	23	13	8	58		5	2	5	114
	計	44	21	11	64	0	9	6	6	161

豊橋芸娼妓の出身地（明治26年）（豊橋市史）

明治26年（1893）の札木・上传馬の豊橋芸娼妓の出身地を見ると、圧倒的に名古屋出身者が多い。特に芸妓にあってはその半数以上が名古屋出身者であり、娼妓についても総数の27%を占めている。

当時の豊橋市長大口喜六は、第十五師団誘致運動の過程で、師団設置後の条件として、札木町・上传馬町の遊郭を適当な場所に移転し、拡張するという約束を陸軍省当局と交わしていた。これは、単に遊郭利用者の利便性を図るという面からばかりでなく、師団設置に伴う道路の整備・機能の向上という点からも早急な対応が必要となっていたからである。

第十五師団を迎えて売上倍増を期待していた札木と上传馬の遊郭業者は、大口市長が極秘裏に移転候補地として適当な場所の選考を進めていたことを知った。当然のごとく遊郭業者は、大がかりな遊郭移転反対運動を起こ

したが、市は移転準備を着々と進め、他人名義で移転地を買収していった。大口市長は、明治40年（1907）9月3日、豊橋市議会に遊郭移転敷地を市有財産として買収するための議案を提出した。買収費として2年間に46,400円の支出を求め、可決された。

こうして札木町・上传馬町の遊郭業者は、同43年8月31日までに所轄警察署に移転届けを提出して認可を受け、瓦町字七反田と東田町字五反田・三反畑・南黒福に移転しなければならなくなった。

年次	地区	貸座敷				娼妓				
		越数	許可	廃業	計	越数	名簿登録	名簿削除	自由廃業	計
43年	東田	55	15	36	34	216	274	349	1	140
44年	東田	34	19	3	50	141	222	127		236
45年	東田	50	15	7	58	236	217	145		308

東田遊郭の貸座敷数及び娼妓数（豊橋市史）

当時、遊郭移転先の瓦町・東田は、市街地から遠く離れた辺地であったため、規程日までに移転を完了した業者は、上传馬町12軒と札木町2軒のみであった。

新潮報記者は、当時の新遊郭を「荒涼たる新遊郭」と評して、道路の未改修、閑散たる状況を伝えた。『新潮報』（明治43年3月7日）によると、新遊郭の規模は次のようなものであった。

「豊橋新遊郭敷地均工事は既報の如く、去る二四日を以て竣工に付同日午後借地人百四十四名に対し、夫々地割の引渡を完了したるが、同敷地総坪数は二万五百三十五坪三合九勺にして、之を二百九区に分画し、更に之を四等に區別して、一等地三千二百九十四坪七合五勺、二等地二千七十六坪三合、三等地五千百十九坪一合六勺、四等地四千百十坪三合八勺とし、地域内中央十字形に六間幅の一等道路を設け、同区内樹形に幅四間の二等道路を設けたり、而して借地人の職業別は、略図の如

く貸座敷六十三軒、料理店三十八軒、飲食店十三軒、芸妓屋六軒を其重なるものとし、其他日用品及雑貨等を商うものに属す」

さまざまな問題を乗り越え、豊橋市街地東部の発展の基礎となる新遊郭移転は進み、明治43年（1910）9月1日から開業し、10月1日には開郭式が挙行された。



遊郭の位置がわかる大正8年の地図（国土地理院提供）

同年12月には、主要道路の幅員4軒の八町線（東八町～東田町）が竣工した。こうして、大口市長が遊郭移転に絡ませてもくろんだ東部発展の基礎が築かれ、都形が大きく変わり始めたのである。

東田遊郭は、昭和32年（1957）の売春防止法が制定されるまで続いた。

なお、昭和の初期には東田遊郭の北西（栄町・東光町）に競馬場も設置されていた。

年次	人員	金額
明治43年	115,233	191,507
44年	113,787	112,912
45年	135,679	120,523

遊興人員及び金額（豊橋市史）



遊郭東側の競馬場（昭和3年国土地理院提供）

校区には、この東田遊郭とは別に、東田仲の町に「東田園」の名で親しまれた遊郭があった。昭和28年（1954）頃、小さな公園を囲み、約30軒の遊女店が次々と建った。わずか3年ほどで忽然と消えた歓楽街であるが、今なお当時の建物が残っている。

(3) 市電の開通

大正14年（1925）、東田まで市電が延長された。この延長は、東田遊郭への便を図るためであった。東田坂上付近から東雲通りに入り、東京堂薬局あたりが終点となっていた。スギ薬局の所に市電の車庫があり、その南側に豊橋電気軌道株式会社の本社があった。この「赤門前」から「東田」間の開通にかかった費用は、工事費29万1640円で、全長4.16kmであった。定員40人の現在より二周りほど小さい車両は、全部で6両あり、10分間隔で運転されていた。

市電開通の頃（中木重治郎氏の話）

私は、市電が東田まで開通した時、車掌として会社に入りました。市電は40人乗り



競輪場前のレトロ電車

で、今より小さな電車でした。信号は、ほとんどありませんでした。商業学校（今の東田小学校の所）や女学校（今の旭小学校の所）の生徒もよく市電を利用していました。登下校時には満員で乗れない生徒もいました。マルサ横の駐車場の所に、電車の車庫と本社（豊橋電気軌道）がありました。大雪の時、前畑から坂上の坂を上る時、車輪が空転して困ったことが、一・二度あったことを覚えています。

昭和35年（1960）6月1日の競輪場前から赤岩口開通により、現在の市電のコースにほぼなった。

昭和38年（1963）には、年間9,571,000人を輸送した市電ではあるが、自動車やバスの発達により、その後年々減少し、平成に入ってから、平成5年（1993）の3,356,000人をピークに徐々に減少し、平成16年には2,629,000人にまで落ち込んでいる。この内訳は、通勤・通学者が766,000人、一般利用者が1,863,000人である。利用者数こそ減少しているが、平成17年の夏には、低床型の新型車両が導入され、依然として今日も市民にとってなくてはならない交通の手段である。



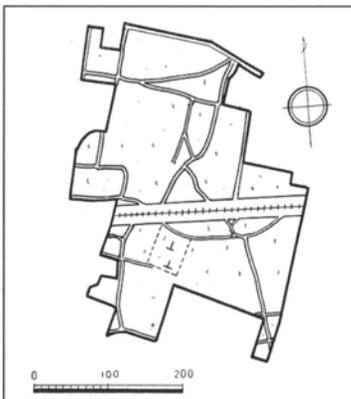
東田坂上を走る低床型新車両「ドリーム電車」

5 昭和・平成の東田

(1) 町の発展と東田校区の土地区画整理事業

① 東田土地区画整理事業（昭和2年～17年）

市電の開通により、家も増えつつあったが、道路は現在のものには程遠く、細く曲がりくねったものであった。豊橋市は、昭和8年



東田土地区画整理 現形図（豊橋整地事業誌）

（1933）10月1日に土木課内にあった都市計画係を都市計画課として独立させ、都市計画の推進にあたらせた。豊橋の都市近代化施策に応じるかのように、各地で地域の市街化をねらった宅地造成を目的とした土地区画整理事業が、任意組合事業として、都市計画事業に対応する形で進められた。

豊橋の中で最初に土地区画整理事業が行われたのが、三八通りをはさみ、旭小学校の東側と東田中郷町の南西部、市電通を南北にはさんだ約8haの狭い地域であった。（現旭小学校校区）



東田土地区画整理 確定図（豊橋整地事業誌）

この地域は、豊橋市の東部方面の発展にともない重要な住宅地域となりつつあったところである。また、豊橋市東部の歓楽街への接続的位置にあり、やがて住宅地帯化されることが容易に予想された地域でもあった。この事業は、農耕を主としない土地の区画整理であったため、当時としてはかなり先進的な広い道路が整備された。

このように、宅地は37%から86%に拡大され、道路も約3倍に増加した。昭和20年の戦災で一部を焼失したが、その後は急速に住宅

地化が進み、市電通りの両側は、すべて商店街となり、著しい発展を遂げた。

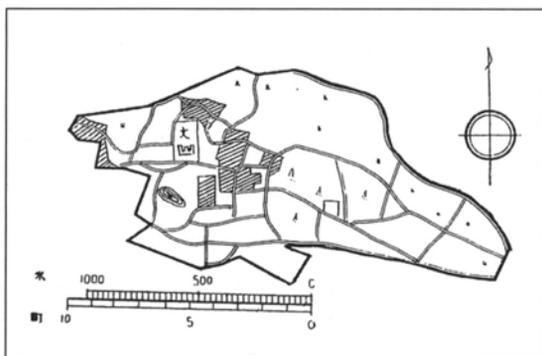
区分	整理前の土地面積	整理後の土地面積
道路	350.00坪	4,190.00坪
宅地	8,278.59坪	17,374.32坪
その他	15,147.23坪	2,703.00坪
公園	—	0

東田土地区画整理事業（豊橋整地事業誌）

②仁連木土地区画整理事業（昭和8年～21年）

次に行われたのが、市電通りから北側に当たる東田町内13字での約100町歩（105.95ha）あまりの広大な土地区画整理である。

昭和4年3月、朝倉貞二・丸地愛次郎・宮川芳次郎たちが発起人となり、土地所有者430名（のち585名）が組合を組織した。当初は、東田区画整理が順調に進んでいたが、土地所有者達は、感情的に東田の整理組合に入ることには反対し、独立して組合を組織した。

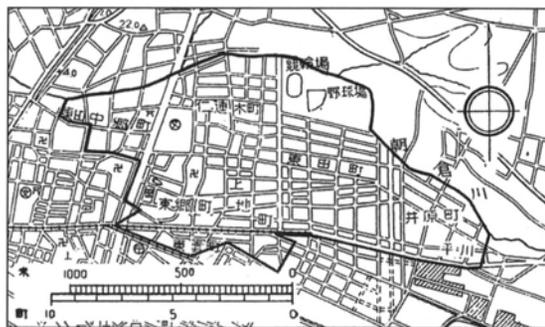


仁連木土地区画整理 現形図（豊橋整地事業誌）

整理前までは、道路もほとんどなく、農耕地と宅地との比が、4.6：1であった。この土地整理の目的は、土地の区画化を図り、豊橋の一等住宅地を造成しようとするものであった。全域の土地用途予想では、総面積に対する住宅の比は、76.6%、商店街は8.11%、小公園は3.2%と計画し、全域を市街地域に造成しようという内容であった。

広域な地域であったことや、すでに既成の宅地があったこと、工事の徴収金を一括的に徴収する問題など、様々な係争問題が起こり、「県下一の問題土地区画整理組合」と言われたこともあった。

終戦後まで続けられたこの事業は、12年の歳月を費やして、昭和21年（1946）に工事を終え、同23年3月末日にすべての登記が完了したのである。こうして組合は、同27年6月30日に解散した。



仁連木土地区画整理 確定図（豊橋整地事業誌）

長年この事業にたずさわった人々の努力により区画整理された地域が、現在の西郷町・東田中郷町・仁連木町・東田町・東郷町・土地町・東雲町である。

丘陵地で豊橋市街を一望できるこの地域は、豊橋市の住宅地域として最適な地となり、地価は高騰した。終戦後は住宅建設の増加にともない、宅地化が著しく進んだ。また、分譲地内に設置された市営競輪場が営業を開始し、バスや市電の開通といった交通の便が整ったことにともない、市電通り沿線には、商店が次々と店を出し、新たな商店街が形成されていった。



仁連木町の住宅街

③他の地域の土地区画事業

昭和34年には、戦災復興時区画整理事業として、売春防止法の制定に伴い、経営の破産を余儀なくされた東田遊郭一帯の整理が終わり、吾妻町が誕生した。

この後も区画整理は進み、平川土地区画整理事業（昭和28年～昭和35年）の結果、新たに住宅地として栄町が誕生し、東田遊園のあった東田仲の町も整備された。

続いて昭和36年～42年にかけて、平川南部土地区画整理事業が発足した。施工面積25.6haという広さであったが、当時の平川南部は、戸数8戸、人口25人の閑散とした地域であった。急激な豊橋市の人口の増加にともない、これまで以上に



宮下町の住宅地の様子

広大な住宅地を開発するのに、うってつけの地域であった。この事業の結果、校区の南東に位置する朝丘町・宮下町が誕生した。

現在の宮下公園は、広域な平川南部の土地整理事業だったため、総面積の3%以上を公園敷地として確保しなくてはならなかったため、約2,000坪（1,966㎡）の大きな公園となった。



広大な宮下公園

もっとも遅かったのが、東田神明宮の南側と西側、青陵街道を挟んだ仁連木町の一部、約



御園町の住宅地の様子

3.5haを整備した東田中郷土地区画整理事業（昭和48年～昭和50年）である。はじめに御園で親しまれたこの地域は、事業終了後は、御園町と名を改めた。この事業を最後に、東田校区の土地整理事業が完成し、現在の町名が全部そろったことになった。

(2) 東田球場・陸上競技場から競輪場へ

(昭和15年～昭和24年～平成16年)

昭和15年度（1940）の愛知県豊橋都市計画運動公園築造費歳入歳出予算書（第48号議案）が、市議会に提出された。第48号議案提出までの経緯についてはよくわからないが、紀元二千六百年記念のために計画されたものである。予算書には次のように書かれている。

予算書

1 用地費	79,900円	
	用地買取立地上物件補償費	
2 施設費	83,600円	
	整地費	32,000円
	競技場施設費	17,950円
	野球場施設費	10,840円
	公園内道路施設費	7,500円
	付帯工事費	12,000円
	雑費	3,210円

数年の歳月を費やし完成した豊橋市総合運動場は、昭和18年（1943）5月22日から使用ができるようになった。その使用料は、陸上競技場と野球場とも同一料金で、次のようになっていた。

使用料

日曜または祭日			
午前	3円	午後	4円 全日 6円
その他の日			
午前	2円	午後	3円 全日 4円
（豊橋市史）			

陸上競技場として利用された期間は短く、昭和24年（1949）3月までの、わずか6年間であった。陸上競技場の跡地は、競輪場とし

(3) 朝倉川改修工事

平成に入り、競輪場北側を流れる朝倉川の様子が一変した。朝倉川は、愛知・静岡県境の多米峠付近に源を発し、豊橋東部の丘陵地帯を西方に流下し、吉田城北側で豊川に合流する流域面積約17km²（市街地54%、山地36%、耕作地10%）、流路延長8.63kmの一級河川である。



お弓橋より西方を眺める

朝倉川の改修は、昭和41年（1966）10月12日の災害を契機に、災害復旧事業及び中小河川改修事業（同44年～同62年）により実施されてきた。改修以前は、流域のほとんどが山林と水田地帯であったため、水量も多く、鮒や鯉、白はえなどの魚のほか、蜚も飛び交う田園河川であった。同40年代以降、区画整理などの宅地開発が普及し、現在流域のほとんどが市街地となっている典型的な都市河川である。

平成元年（1989）から同5年にかけて、愛知県は朝倉川の貴重な自然を保全し、市街地において失われつつある潤いのある良好な水辺空間を取り戻すため、豊橋市と共同で「朝倉川水辺リフレッシュ事業」を実施した。

東田橋から井原橋間約560mの親水護岸整



競輪場北側の人工の滝と水上ゾーン

備や漁巢ブロック設置等の、自然への配慮を考えた改修工事を実施した。豊橋市は競輪場周辺の河川敷を利用し、「水と親しむ」をメインテーマに、シンボルとなる滝と水上ステージを造り、地域の方々が憩い、集うことのできる空間を整備した。春には、東田公園の桜とマッチし、多くの家族連れで賑わう場所となっている。また、休日には親子で魚とりをしている姿も見かけることができる。

この下流側の仁連木橋から境橋にかけては、「自然との出会い」をテーマに、自然の保護や堤防肩への植栽を行うとともに、既存の瀬や淵を保護する等、多自然型の河川作りを行った。堤防には、遊歩道や河床への階段が設けられ、水と自然に触れ合う空間が創出されている。



整備された朝倉川の石段と歩道

毎年春には、多くの市民・団体の参加を得て、朝倉川クリーン大作戦が実施されている。秋には、青陵中学校主催の清掃活動が行われ、地域の住民に愛される憩いの河川となっている。



秋のクリーンアップ作戦

第3章 教育と文化

1 教育の充実と発展

(1) 慈善事業の地として～豊橋育児院～

豊橋育児院は、現在の市立豊橋高等学校（東郷町）のあたりにあった。敷地は農場を含め二千坪（6,600m²）を上回っていたといわれるが、大正15年（1926）の移転により、今は当時をしのばせるものは何一つ残っていない。

この育児院は、両親と離別し孤児となった不幸な子どもたちを収容するだけでなく、自活できるまでに教育をしようとした社会事業施設であるとともに、一種の教育施設でもあった。

福祉行政が薄かった明治から大正にかけての時代であったため、育児院は、常に運営資金に乏しく、募金活動や慈善興業などを積極的に行い、経営難をなんとか乗り越えていた。

豊橋育児院の発端は、明治28年（1895）豊橋のキリスト教信者が岐阜県にあった濃飛育児院から、三河出身の児童数名を引き取り、花田村稗田に濃飛育児院豊橋支部を結成したことに始まる。支部は、東海育児院と改称し、運営に努力したが、経営難から明治33年（1900）東三河仏教会に引き継がれた。

東三河仏教会は、児童16名を譲り受け、渥美郡長山田正を院長に、豊橋警察署長岩泉泰を副院長として、施設も称名院（川崎町の悟真寺の寺社役所）に移し、豊橋町からの補助金交付を受け発足した。運営の中心となったのは、龍拈寺の住職久我篤立や三浦碧水・大口喜六・永野武三といった後々豊橋市を動かした人たちであった。

明治39年（1906）、豊橋育児院と名称を改め、専任の主事となった青山^{みちたか}衝天を中心に経営の刷新を図った。

主事の青山は、明治40年（1907）に院長となり、同43年に手狭になった称名院から東田町（現豊橋市立高等学校）に育児院を移した。これまでに教育した児童は、男子87名、女子77名で合計164名に達していた。青山は、積極的に募金活動や慈善興業を行ったり、篤志家の寄付金を募ったりした。

大正10年（1921）に豊橋有鄰財団と改称し、活動を次の5事業とした。

豊橋有鄰財団の5事業

- 1 不良及び犯罪少女の感化
＝女子感化部（静修女学校）
- 2 不良及び犯罪少年の感化
＝男子感化部（保導所）
- 3 孤児及事情これに等しき児童の教育
＝育児部（成蹊塾）
- 4 労働者児童の昼間保育
＝昼間保育部（春風園）
- 5 妊娠その他母性及び児童の保護
＝児童と母性の保護部（厚生閣）
(豊橋市史)

同財団のこのような拡張策が、市当局とどのような軋轢を生じたのかよくわからないが、大正15年（1926）から順次知多郡大高町に移転し、昭和8年（1933）には、東田の豊橋有鄰財団は閉鎖された。

(2) 東郷町にあった女子教育の拠点

～豊橋実践女学校～

豊橋実践女学校の歴史は古く、明治42年（1909）1月に熱心なキリスト教信者であった

満田樹吉・オリガ夫妻が、キリスト教の精神を基調とし、社会奉仕事業として豊橋市西八町一丁目（現：森外科西）に裁縫塾を開いたことが始まりである。



創設者「満田樹吉・オリガ」夫妻の胸像

大正13年（1924）4月、豊橋裁縫実習女学院

と名称を改め、大正15年（1926）1月に、各種学校の許可を受けて、豊橋市東郷町（現市立豊橋高校所在地）に創立した。

昭和5年（1930）4月に、実践学校令中職業規定により、文部大臣の認可を受けて中等学校に昇格し、豊橋高等実践女学校と名称を変更した。同17年（1942）には、高等女学校令により、豊橋桜丘高等女学校と名称を変更した。その後、戦災に合い校舎を全焼したため、中八町の仮校舎で同24年まで過ごすことになるが、同22年（1947）の学制改革により、桜丘中学校を併設した。

豊橋空襲から4年経った昭和24年（1949）4月、東郷町の焼け跡に念願の校舎が復興したためもどった。

昭和37年（1962）に桜丘学園の男子部（同34年）と女子普通科は、牛川町田中（北校）の地に移ったが、東郷町の校舎は南校と呼ばれ、昭和40年（1965）4月まで南校舎に中学校がおかれたが、現在は牛川町の高等学校に



現在の桜丘高等学校

併設されている。

この跡地に立ったのが、現在の市立豊橋高等学校である。

(3) さまよえる市立豊橋高等学校

～独立校までの険しい道のり～

「市校」（市立豊橋高等学校）が、現在の東郷町に落ち着くまでの道のりは、大変険しいものであった。その詳細は、「創立50周年記念誌」（市立豊橋高等学校）にゆだねるが、簡単にまとめてみることにする。

昭和2年（1927）4月1日に、東田町（現東田小学校）にあった豊橋市立商業学校内に、豊橋市立商業専修学校として併設された。

同16年（1941）4月1日に、商業学校規定に基づき、豊橋市立第二商業学校と校名を変更した。続いて、同19年（1944）4月1日、教育非常措置令（戦時中）に基づき、豊橋市立第二工業学校に併置された。豊川海軍工廠への学徒動員を命じられたり、戦災で校舎や付属施設設備等を全焼したりした。

終戦後の昭和20年（1945）10月5日に、舟原町の豊橋市立中部中学校の校舎に移転し、翌年4月1日には、学則改正に伴い市立第二商業学校が復活され、市立第二工業高校と共同で授業が開始された。



耐震補強が施された市立豊橋高等学校の校舎

その後、市立学校の整理統合の実施にともない、校名を変えながら、向山町から今橋町（元歩兵第18連隊跡→豊城中学校）と移った。

この間の昭和25年（1950）4月1日、市の条例により、校名を豊橋市立高等学校とし、学則改正により、夜間課程で修業年限は4年、

男女共学となり、生徒定員は、普通課程200人、商業課程400人となった。

東田町を離れ約20年経った昭和42年9月1日に、東郷町の現在の地に移転し、念願の独立校となり、翌年4月1日に現在の校名である豊橋市立豊橋高等学校と校名を変更し、現在に至っている。

現在は男女共学の単位制の教育課程を実施しており、生徒募集は、昼間部（二部制）の普通科160名、夜間部の普通科40名と商業科40名を募集している。平成17年度の生徒数は、昼間部403人（男231人 女172人）夜間部普通科105人（男61人 女44人）、商業科88人（男44人 女44人）、総計596人である。

(4) 地元の要望に応じて～豊橋市立商業学校～

明治30年代、中等教育は徐々に整備されていったが、豊橋地方のめざましい商業発展にともない、実業界からは有能な労働者が必要となった。豊橋商業会議所会頭（明治33年～同35年）であった遠藤安太郎は、町長に公立商業学校設置の請願を行ったが受け入れられなかった。そこで、遠藤は、独力で商業学校を建設する意志を固め、明治39年（1906）に渥美郡豊岡村（現在の瓦町の不動院の隣）に私立豊橋商業学校を開校した。当時、豊橋市における実業学校は、これ一校のみであった。

残念なことに、私立商業学校は、昭和8年3月3日第25回卒業生を最後に、学制改革にともない市立豊橋商業学校に吸収される形で、その幕をとじた。

大正8年（1919）頃になると、中学校や高等女学校への入学難が起きたり、市民の中からも中等教育機関の増設要望が強くなったりしたことなどから、市も実業界で活躍する若者の重要性・必要性を理解し、商業学校新設を決定した。同11年（1922）、市は、修業年限5年、生徒定員500人の豊橋市立商業学校

設立の認可申請を行った。

大正12年4月1日に開校が実現したが、当初予定されていた向山の用地買収が思うようにはかどらなかつたため、急ぎよ東田に校舎を建設することになった。

大正12年11月4日実地踏査結果後の構想

全敷地（総坪数） 6千坪
 工費 145,539円
 大正13年3月までに
 二階建校舎7教室及び玄関
 うち3教室は校長、職員、応接室
 生徒控所 50坪 小使 宿直
 物置40坪 門廊下その他30坪

大正15年3月までに

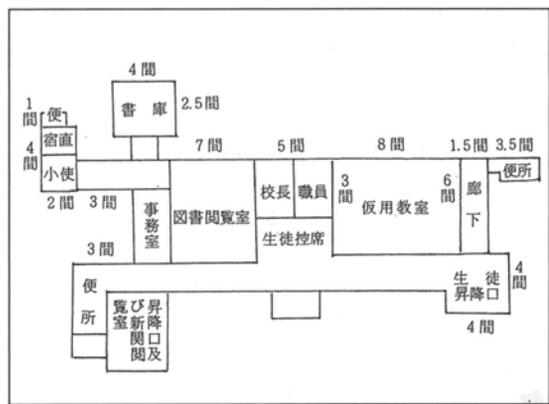
二階建教室9教室（137坪）
 講堂96坪実践室96坪

（豊商80年史）

東田の買収地は、堂前（現東田小の西側）、はじみごう姜郷（現東田小の東側）、朝倉（現東田小の北側）の田や畑、一部宅地が当てられた。

開校はしたが、しばらくは校舎もなく、新校舎が東田町（現東田小）に完成するまでの間、市立図書館（松葉町）と松葉小学校の一部を借用し、仮校舎として開校した。（1学年の定員100名）

一番困ったことは、運動場がなく、体力をもてあましたことである。寒風吹きすさぶ中で体操をしたり、校外授業を大いに取り入れたりした。この仮校舎時代は、大変な苦勞と不便があったが、和気あいあいとした雰囲気



大正12年の校舎見取り図（豊商80年史）

のなかで、充実した学校生活を送っていた。

市立商業学校の教育方針は、商業に従事するために必要な知識技能を授けることはもちろんであるが、単に知識技能を授けるべきではないと考え、人物の養成にその重きをおいていた点に特徴がある。つまり、学校は一大家族であり、学級は家庭の一単位であると考え、卒業にいたるまで、学級編制を変更しなかった。

大正13年（1924）12月には、東田の校舎の一部が竣工したことにより、市立図書館の仮

年度	学級数	教員数	生徒数
大正12年	2	7	100
13年	4	11	200
14年	8	15	400
15年	12	21	594

市立商業学校の生徒数と教員数
（豊商80年史）

舎から移転し、大正14年4月には、生徒定員1,000人に増員するための認可も得た。

建築工事も順調に進み、大正15年4月3日に校舎落成式を盛大に実施した。

昭和2年（1927）には、夜間課程の豊橋専修商業学校を併設し、同6年4月には、私立商業学校を吸収した。同7年には修業年限3

年の2種課程（商業人の短期養成）を開設した。

昭和2年3月には、全学年マラ

	一種5年間	二種3年間
商事要項	6単位	7単位
商業実践	3単位	6単位
簿記	10単位	8単位
珠算	6単位	5単位

一種・二種の教育課程
昭和7年の教育課程（豊商80年史）

ソンが実施され、1・2年は、学校—岩田町—山中橋—新町橋—餌指橋—学校（約8km）

3年以上は、学校—岩田町—岩屋観音折返し—東海道—新町橋—餌指橋—学校（約10km）のコースであった。

また、昭和2年5月6日～5月20日まで満鮮旅行（当時の満州・朝鮮半島）が行われた。「日本各地のみならず、規模壮大なる大陸文化・風物に接することにより、雄大な気風、



昭和2年のマラソンコース（豊商80年史）

及びひろく見聞を広める」ことを目的に実施された。

満鮮旅行（修学旅行） この満鮮旅行は、現在の修学旅行であるが、当時としては大変大きなスケールのもとに計画され、他校生がうらやむような学校行事であった。その日程をкаいつまんで拾い出してみると次のようになる。

市立商業学校の修学旅行の概要

- 5月6日 京都見学
 - 5月7日 宮島見学 下関見学
 - 5月8日 釜山見学
 - 5月9日 京城見学
 - 5月10日 仁川見学
 - 5月11日 平壤見学
 - 5月12日 安東新義州見学
 - 5月13日 奉天見学
 - 5月14日 旅順見学
 - 5月15日 旅順見学
 - 5月16日 大連見学
 - 5月17日 前七時香港丸乗船 船中泊
 - 5月20日 神戸着～豊橋着
- （豊商80年史）

当時の新朝報に連載された5回生の見学記の一部を紹介する。

～略～ 川では朝鮮婦人等が三尺の棒を手にして白布を打って洗濯している。平壤を発し満州へ近づく。八時五〇分安東県のプラットホームに入り、税関は写真、双眼鏡のみ証明書を受けて無事に通る。新に満州へと吉田健児の第一歩は印せられたのである。五月一五日朝奉天より一同無事に到着、

直ちに旅順に向かひ、二〇三高地、東鷄冠山等日露の肉弾戦の跡を弔ひ、勇士の英霊をなぐさめ、同夜大連に引き返した。大連在住の私立商業卒業生十数名の方々は、わざわざ出迎えられ、案内その他万般につき懇切に世話され ～略～



奉天城外北陵にて（豊商80年史）

この旅行は3年間続いたが、経済不況等の事情で、また経費もかさむため中止となった。

この当時の市商の生徒が年間にどれぐらいの費用がかかったのかをみてみることにする。昭和3年市商4年のN氏の年間の金銭出納簿を参考にしてみる。

当時の学費等（単位銭）

A 授業料等学校納金		B 教科書参考書代	
授業料	6,000	教科書	1,657
校友会費	600	参考書	725
試験用紙代	30	辞書	125
化学実験費	10	雑誌	120
化学実験用具代	135	単行本等	188
クラス会費	30	合計	2,935
キャンプ費	105	D 被服費及修繕費	
修学旅行費	218	洋服	1,700
日記帳代	32	靴	365
合計	7,160	ユニフォーム	70
C 学用品費		靴修繕	68
ペン軸	18	下着	50
ペン先	28	靴墨	68
インク	85	時計修理	55
黒汁	5	自転車修繕	15
画用紙	10	鍵	15
用紙	25	合計	2,405
カラー	12	E 趣味娯楽費	
クレパス	18	氷水	5 映画 5
紅殻	5	ハガキ	71
ノート	231	釣道具代	47 印紙 17
合計	631	ボール2個	40 便箋 10
		封筒 1	東風会費 404
		合計	610

（豊商80年史）

これらのものを合計すると、年間137円の支出になる。これは、当時の旧制中学卒業者の1か月の給料の約5.5か月分に相当する金額であり、随分高価で学生生活がいかにお金のかかるものであったかが分かる。

学校納入金は、もちろん教科書・参考書代が大きなウェートを占め、趣味娯楽費が少なく、学業に専念していたことが容易に推測され、当時の学生の勤勉さがしのばれる。

なお、趣味娯楽費の中にある「東風会費」であるが、これは岩田校区出身の豊中生・二中生・豊商生・蒲農生の親睦会費である。

しかし、時代は大きく戦争へと傾き始め、昭和6年（1931）9月18日には、奉天郊外の鉄道爆破事件を契機に満州事変が起こった。続いて、同12年（1937）7月の盧溝橋事件をきっかけに、日中戦争が本格化していった。**戦時下の学校行事と新講堂建設** 昭和11年（1936）の学校日誌をもとに、戦争に関するような学校行事を拾い出してみた。

2月8日	2年野外演習
14日	5年浜松地方工場 浜松飛行連隊見学
3月2日	1年野外教練
10日	陸軍記念日 演習見学
17日	3年野外教練 1・2年行軍
4月29日	天長節拝賀式観兵式参加
6月8日	3年野外教練
9月19日	満州事変記念日 東三中学校夜間連合演習参加
25日	1年野外教練
10月22日	県防空演習参加 避難演習
11月9日	5年野外演習
12月3日	4・5年野外教練

（豊商80年史）

戦時下ではあったが、戦場が朝鮮・中国ということもあり、戦勝にわく時代において、生徒の学校での生活は、今日とは様相をかなり異にしていたことが分かる。

生徒定員の増加にともない、講堂や武道場では生徒を収容しきれない問題が出てきた。戦時体制下で物価は上がり、特に鉄材は暴騰し、新講堂の建設は到底困難となったが、設計を変更し、校地に隣接する^{はじかみ}姜町の土地を買収し、昭和13年（1938）に講堂を新築することになった。



昭和15年完成の講堂
（豊商80年史より）

新講堂は昭和15年10月26日に落成し、昭和46年（1971）まで東田小学校の講堂（体育館）として使用された。

市立工業学校への転換と勤労働員 戦時下の軍需産業の繁栄にともない、商業学校不用論がわきおこり、市立商業学校は、昭和18年（1943）の中等学校令により、修業年限が4年となり、実業教育を施す実業学校（工業高校）となっていた。

同19年4月の入学生から、豊橋工業学校生徒として入学し、2年生も2年次には工業学校に転換し、同一学校でありながら、低学年の1・2年生は工業校生、3年以上の上級生は商業校生として、東田町の校舎で授業を続けた。しかし、実際には3年生以上の上級生は、勤労報国隊として工場に動員され、学校にはいなかったのである。

中等学校生に対する集団勤労作業は、昭和13年より始まり、年を追って加速度的に強まってきた。戦局の推移にともない、同18年の後半から各種の非常措置がとられ、同19年には「決戦非常措置要綱」の決定で、中等学校以上一斉に通年動員に出動が決定され、4月13日に陣行会が行われた。

この陣行会の在校生代表であった西村豊氏

は、8月3日の自らの日記に次のように、学徒動員のようすを綴っている。

学徒動員生徒の日記

8月4日から豊橋精密工場に150名、大清水の東洋通信工場に50名、豊川海軍工廠に50名が通勤で行くことになった。10月10日からは、さらに低学年まで動員され、即市工業2年生が大陽航空機に50名、豊橋精機に50名、豊川海軍工廠に100名、同11日には、市工業1年生が豊川海軍工廠に200名が動員されていった。

昭和20年8月15日の終戦を前にして、同年6月19日深夜から20日未明の豊橋空襲で校舎を焼失してしまった。しかし、同21年4月には豊橋市立商業高等学校（修業年限5年）が復活し、予備士官学校歩兵隊兵舎（現愛知大学）に移転し、市立農業学校（市立女子商業学校）と同居の形で開校した。

昭和22年の1月には、草間町の兵器補給廠の東倉庫に移転したが、各種の学校制度の改革により、同26年4月1日には、向山町の官有地に落ち着き、名前も現在の愛知県立豊橋商業高等学校となり、再び東田町に戻ることはなかった。

豊橋市立商業学校が東田町（仁連木町）にあったという事実を残すため、平成2年（1990）5月20日に同窓生有志により、東田小学校南門を入った所に記念碑が建てられた。

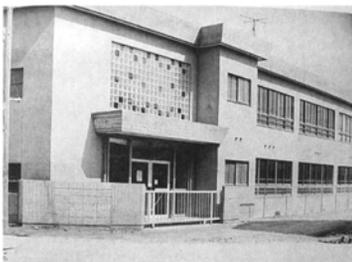


有志により平成2年に建てられた豊商記念碑

2 幼稚園・保育園、小学校教育

(1) 東田幼稚園 (旧豊橋幼児園)

東田幼稚園は、昭和21年(1946)に東雲町に開園した。同30年8月には、学校法人豊橋学園の認可が下りた。同39年には、鉄筋コンクリート2階建ての園舎も完成し、地域の子どもたちが通う幼稚園として定着した。地域の人



昭和45年頃の東田幼稚園

口増加にあわせるように、教育内容と施設設備を充実させ、約3,500名の卒園生を送り出し、地域の幼児教育にあたった。

教育方針には、「よくみる・よくきく・よくおこなう」を掲げ、社会の要請による徳育・体育・美術・音楽などの教育にも力を入れた。毎年、姉妹校の豊橋幼稚園と合同で図工展を開いたり、陸上競技場で運動会を行ったり、市の公会堂でお遊戯会を行ったりした。しかし、平成11年(1999)3月に閉園した。東田校区にも多くの卒園者がおり、当時の行事を懐かしんでいる。

(2) 双葉保育園

双葉幼稚園の歴史は、戦前の昭和11年(1936)にさかのぼる。当時は、全久院の西側に木造校舎平屋建ての園舎があった。



全久院にあった双葉保育園

規模であったが、給食室や遊戯室も備えてい

昭和23年(1948)には、双葉保育園と名を改め、佐藤堅方氏が初代園長に就任した。職員3人、児童54人という

た。

年々施設も充実し、鐘楼の東側には6m四方のプールがあり、現在の駐車場のあたりがすべて運動場で、園としては広い運動場を設けていた。

地域の子どもたちの幼年期教育に力を入れていた双葉保育園ではあったが、堅方園長の実弟の佐藤勝洋園長の代の昭和59年3月31日をもって、地域の人々から惜しまれながら閉鎖となった。閉鎖時の職員は8人、園児は100人前後の規模であった。

(3) 恵日幼稚園

恵日幼稚園は、臨済寺の境内の一角に位置し、樹木に囲まれた広い園舎と運動場を備えている。

戦後まもなく、亀山黙道初代園長が人心の荒廃するのを見て、社会教化のためには、幼児教



恵日幼稚園

育が必要であることを感じ、昭和23年(1948)11月に恵日保育園を発足させた。同31年(1956)12月には、宗教法人立恵日幼稚園として認可を得た。高台の自然に恵まれた環境を生かして、仏教精神を根幹とした教育を行っている。茶道・習字・静座などを通じての礼儀作法の“静”の教育、運動場や室内遊戯室・プール等の遊具を通じての体育遊びの“動”の教育が行われている。

現在は、園長・副園長以下12名の職員で、思いやりと感謝と合掌のできるように、また自ら考え、工夫し、やる気を起こすようにと念願し、円満なる人格の涵養する情操教育を目標とし、127名の園児の指導にあたっている。

(4) 昭和保育園

太蓮寺本堂の東側に建つ鉄筋3階建の新園舎が完成したのは、昭和48年（1973）のことである。昭和保育園の開園は、戦後間もない昭和27年（1952）のことである。

当時は、戦後の物資の乏しい時代であったし、豊橋空襲で太蓮寺もその多くを



昭和保育園

焼失していたが、西脇・西郷・檀家等々の勤労奉仕作業により、中野町にあった山口毛織の建物の使えるものを牛車で運び、建築資材を確保した。開園までに3年の歳月を費やした。開園当時は、木造平屋建てで、園長の他に、主任1名・保母3名・給食婦1名・雇用人1名の合計7名で運営していた。

昭和44年（1969）の認可時は80人の定員であったが、新園舎の完成に伴い、同49年には定員が150名、同50年には180名となり、この定員が現在まで続いている。また、平成3年には、これまでの「社会福祉法人昭和保育園」の法人名を変更し、「社会福祉法人太蓮寺福祉会」が運営にあたっている。

現在は、理事長・園長・主任以下、25名の保育士や4名の調理員で幼児教育を行っている。共働き時代を反映してか、最近は、通勤途中に子どもを預けていく家庭も多い。

(5) 東田小学校

日本の近代的な教育制度は、今からおおよそ130年前の明治5年（1872）8月3日に発布された「学制」から始まる。

この学制は、日本全国を8大学区に分け、さらに一大学区を人口13万人単位として10の中学校区に区分けしている。愛知県は、第二大学区に属し、渥美郡は宝飯郡とともに第10

中学区であった。そして、それぞれの中学区は人口六百をめどとして、いくつかの小学区に分けられた。

当時の村は、額田県から愛知県となり、全県下を15の大区に分けられ、渥美郡に所属していた仁連木村は、その中の二小区であった。仁連木村は、戸数は少ないが、ひろい面積を持つ純農村であった。当時の様子を絵地図や字別戸数一覧表で見るとよく分かる。

学制発布以後、豊橋地方にも小学校が設立されていった。

明治6年12月末まで

に、27の小学校が誕生した。当時の仁連木村は、第7番小学田尻学校（岩田小学校の前身）の校区であった。

番	字名	戸数
1	蟬川	0
2	北裏	0
3	東郷	38
4	姜郷	12
5	朝倉	0
6	西郷	96
7	前畑	8
8	向郷	17
9	猿子山	0
10	宮下	0
11	舟原	0
12	小縄手	0
13	薫瀬川	0
14	西ノ又	0
15	猿屋敷	11
16	談合宮	33
	合計	215

字別戸数一覧表
（百年のあゆみ農）

①第7番小学 田尻学校の時代

所在地 渥美郡田尻村祥雲寺 宮殿

通学区 平川新田・田尻村・手洗村・上岩崎村・下岩崎村・仁連木村

明治7年（1874）3月、仁連木村にも田尻学校の分校として、「勸善分校」が全久院の禅堂において開校した。

開校といっても、校舎は、寺子屋の時と変わらない22坪ほどの禅堂であり、児童数も22名と少ないものであった。当時が百姓には学問は不要という考えが強い時代であることから、当然であったといえよう。

明治8年（1875）8月、勸善分校は田尻学校から独立し、校名も第10中学区第5番小学

仁連木学校と改められた。その後も学校が統合・新設されたり、町村合併があったり、就学率向上のために教育令が変更されたりするたびに学校番号や学校名も変わったが、同25年(1892)まで、その所在地は全久院であった。

校名変遷表

明治7年3月 第10中学区第5番小学 勸善分校
 明治8年8月 第10中学区第5番小学 仁連木学校
 明治9年4月 第10中学区第18番小学 仁連木学校
 明治13年5月 渥美郡第12番小学 仁連木学校
 明治17年5月 渥美郡第11学区 仁連木学校
 明治20年4月 渥美郡尋常小学 岩田学校仁連木分校
 明治26年1月 渥美郡豊岡村立豊岡第二尋常小学校
 明治40年3月 豊橋市東田尋常小学校

明治期の休業日一覧

明治7年 大祭祝日・大祓・1と6の日(除31日)
 夏期午後・冬休み2週間
 明治9年 大祭祝日・日曜日
 夏期午後・冬休み2週間
 16年 大祭祝日・郷村社祭日・土曜午後・
 日曜日 夏休み3週間・冬休み2週間
 34年 大祭祝日・郷村社祭日・土曜午後・日曜日
 夏休み1ヶ月・冬休み2週間・学年末1週間

②西前山町に学校があった時代

明治25年9月、西前山(現旭校区)に校舎を新築して、全久院から移った。翌年の明治26年1月、名称を豊岡第二尋常小学校として本校より分離独立した。

当時の西前山は、小さな山を崩して畑にした所で、畑ばかりで人家は東の方に一軒あるだけだった。このころの様子を古老に聞いてみた。

学校は小さなものだった。今で思うとおかしいくらいだった。生徒は上地と下地と瓦町とで一級30人くらいしかいなかった。

岡田たけ(明治25年生)

西前山の初めの学校は、東田の東の方にあった病院がいらなくなったのもってきて建てたものだった。そして、私が1・2年のころ、新しく四教室に建て替えられた。その時には、全久院を借りて校舎が立つまで勉強したものだ。教員室は、玄関を入れて突き当たりの奥にあった。先生は四人だった。

外山周作(明治25年生)
 (百年のあゆみ農)

明治の中頃までは、学年の初めが必ずしも統一されたものはなかった。これが現在のよ

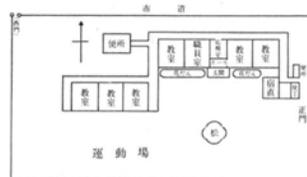
うな4月1日からという形になったのは、明治33年以降(義務教育)のことである。入学式や始業式が行われるようになったのもこの頃からである。また、明治時代の休業日も県の「小学校教則」により変化していった。

明治39年(1906)8月1日に豊橋に市制がしかれ、翌40年3月1日に元豊岡尋常小学校の校舎を用いて、豊橋東田尋常小学校が開校された。同40年4月、尋常小学校は、義務教育年限が6年に延長され、これより先、同36年には国定教科書制度が実施され、ここに明治5年に発布された学制が完成し、近代学校教育制度が確立されたのである。

学 齡	6	7	8	9	10	11	12	13	14
明治6年	下等小学				上等小学				
明治14年	初等科			中等科		高等科			
明治19年	尋常小学校				高等小学校				
明治33年	尋常小学校				高等小学校				
明治40年	尋常小学校				高等小学校				
昭和16年	国民学校初等科				高等科			特修科	

学校制度変遷と修業年数

開校当時の東田尋常小学校は、校庭北側に簡素な木造平屋建校舎が一棟(普通4教室、玄関入口奥の職員室兼応接室)あるのみで、

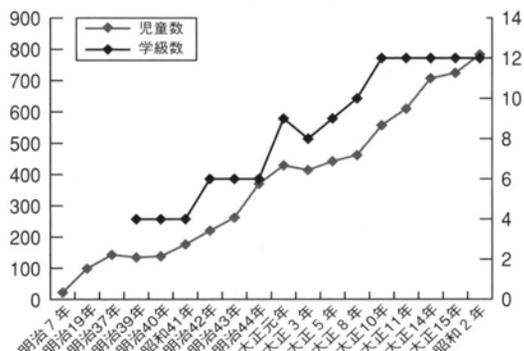


明治末期の学校図面

豊岡尋常小学校の頃の校舎そのままであった。この北校舎は、その後明治・大正・昭和と戦災

で焼失するまでその姿の一部をここにとどめていた。

東田尋常小学校の児童数は、明治から増え続けたため、大正5年（1916）には、木造平屋建校舎4教室が増築された。



明治から昭和初期までの児童数・学級数の推移

同9年（1920）4月、講堂建設に備えて、校庭東南のすみにあった耕地や森林217坪を建設用地として買収し、校地を拡張した。そして大正11年（1922）には、講堂兼雨天体操場及び木造校舎一棟（普通3教室、理科室）が完成した。さらに、同14年（1925）には、校庭西側にある墓地719坪を校舎建設用地として買収し、地元青年団によって墓地移転作業が進められていった。また、同15年には、東田尋常小学校に青年訓練所が併設された。



大正末期の学校図（百年のあゆみ展）

昭和に入っても児童数は増え続けた。昭和2年、墓地移転作業完了によって、大正5年に増築された南校舎の西側に、本校最初の木造二階建校舎（8教室）が増築された。当時の学級数は12学級であった。

余談になるが、平成14年（2002）にノーベル物理学賞を受賞した豊橋生まれの小柴昌俊教授が、昭和11年（1936）の第4学年の2学期から、第5学年の1学期まで在籍していた

のが、この西前山にあった尋常小学校時代である。

その後も児童が増加したため、平屋建校舎は次々と二階建校舎となり、その形を整えていったが、時代は戦争へと傾いていった。

日中戦争から太平洋戦争へと戦火は広がり、昭和16年（1941）4月からは、東田国民学校と名称が変更され、初等科がおかれた。

戦争が長引き、食料確保のために運動場は掘り起こされ、さつまいも畑や麦畑となった。東田国民学校は、宮本公園と現在の野球場付近に学校農園があり、学校から鍬やかまを持って作業に出かけるようになった。パンツに白鉢巻姿で肥桶をかついでいったこともあり、時には馬糞を手で運んだこともあったそうである。また、多米の出征軍人宅への勤労奉仕として桑の皮剥ぎに出かけたり、田んぼの落穂拾いを手伝ったりしたこともあった。

昭和20年（1945）になると、豊橋市もたびたび空襲を受けるようになった。



仁連木に落ちた焼夷弾

そこで、運動場の東側に大小の防空壕が教師と児童の作業で築かれた。同20年6月19日深夜から20日未明にかけて、B29、90機の来襲で焼夷弾攻撃を受け、豊橋市は市街地の7割強を焼失した。長い歴史と伝統を誇る西前山の東田国民学校も一夜にして灰燼となってしまった。当時の記事が、学校の沿革誌に記されている。

昭和20年の学校沿革誌

20年の空襲により全焼す。幸い夜半なりしため、校内にての罹災者はなかったが、家庭にての罹災者900名、死亡4名、児童四散し、その収拾困難をきわむ。

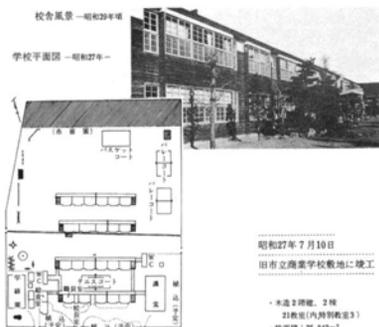
③戦後の苦難の時代

昭和20年（1945）7月11日より豊橋幼稚園

④現在地の東田小学校

昭和27年（1952）7月1日に旧市立商業学敷地に、木造2階建2棟、21教室を有する新校舎が竣工した。移転後まもなく「小学校では広すぎるから運動場を切り売りしよう」といった話まで出た広大な敷地である。市立商業時代の建物は、講堂のみを残し、空襲で消失していた。運動場には、雑草が茂り、かつては菜園として耕されていたということであった。その名残か、校舎が新築されたときにも、無数の芋畝の後が見られた。市立商業時代に学校を緑で包んでいた大木は、すべて切り倒され、立っていたのは戦災後、手をつけられなかった焦げた枯木のみであった。正門を入ったところにある根元がこぶ状になっている銀杏の木は、やけ焦げ切り倒された後から芽を出したものである。

その後、昭和29年には、旧市苗園に小プールが建設され、同33年には25m6コースの本格的な大プールが完成した。



近代化に伴い、昭和42年より鉄筋3階建の校舎が順次新增築され、旧市立商業学校の講堂は昭和46年に体育館として改装された。

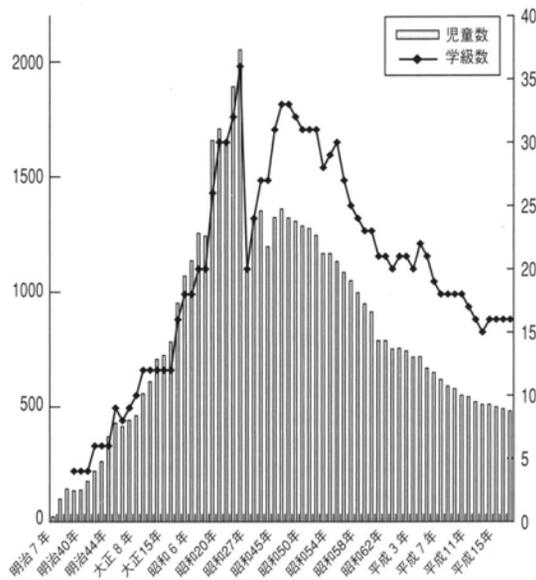
この頃、マイカー時代に入って10余年になり、多米街道と青陵街道の交通量は増し、学校を取り巻く交通状況は一段と厳しくなり、交通戦争ということばも生まれていた。そのため、北臨済寺と東田横断歩道橋が相次いで設けられた。運動場北側には交通コーナーが新設され、自転車教室が昭和46年より実施され、交通安全教育にも力が入れた。



昭和63年の東田小全景航空写真

昭和49年（1974）には、創立百周年記念行事の一環として、東田小学校百年誌「百年のあゆみ晨」が編集されたり、桜の苗木が植樹されたり、運動場西側に記念碑が設置されたりした。そして、同年11月3日には、記念式典が盛大に挙行された。

昭和54年（1979）には、北校舎西側の校舎が鉄筋3階建の校舎になり、続いて昭和56年（1981）には、南校舎と体育館が新築された。同年、交通コーナーの跡地に木造遊具の「わんぱく山」・「ふたご山」が完成した。同58年（1983）に玄関改築、翌59年（1984）にプールが改築され、現在の東田小学校の姿となった。



東田小の児童数・学級数の推移

3 社会教育の充実

(1) 仁連木老人福祉センター

福祉センターは、豊橋で最も古く、昭和40年（1965）4月の「老人福祉法による老人福祉センターの設置及び運営について」にもとづき、同41年10月1日の大口公園の現在地に開設した。鉄筋コンクリート造2階建てで、建物延べ面積は約500㎡である。老人センターは、「高齢者共



仁連木老人福祉センター

通の話題や健全な娯楽の場を提供するとともに、健康相談・機能回復訓練を行って、高齢者の福祉の増進」を目的に活動している。趣味の教室として、歌謡曲や大正琴、ダンスなどが毎週定期的で開催され、年間9千人が利用している。また、個人団体の利用も盛んで、ダンスや俳句、敬老会の演芸会など地域に密着した活動が行われ、年間では1万7千人余りが利用している。

健康相談やシャキシャキ相談が定期的に行われている。また、風呂や健康磁気治療器のヘルストロンの利用者は、年間1万人を超える盛況振りである。今後、さらに校区住民の高齢化が進むため、施設の利用者が増加することが予想されるが、老朽化も進んでいる。

(2) 東田校区市民館

市民館は、地域の人々の結びつきを強め、人々の暮らしを豊かにするための施設である。

東田校区市民館は、昭和55年に建てられ、民謡・手芸・書道等のサークルが部屋を利用したり、校区の人々が



東田校区市民館

集会を開いたりしている。また、秋には、市民館の行事として「市民館祭り」を開催されている。

校区市民館は、東田小学校の北側、プールの東側にある白い二階建ての建物で、玄関を入るとすぐ左側に事務室がある。

玄関の右側の部屋は、図書談話室で、子ども向けや大人向けの本が全部で千冊ほど書架に並んでいる。他にも、和室や集会室、児童室兼研修室、小会議室などがあり、年間を通して、多くの校区民が利用している。

4 史跡や寺社にまつわる人物・伝承

(1) 薑御園（はじかみみその：現東田神明宮）

薑御園は、伊勢神宮の御厨や御園の一つである。御厨は、元来厨房（台所）を意味する語であったが、主として魚貝や果物類を調達し、納めることを目的としたところを意味するようになった。御園は、元来野菜類を栽培するための土地をさしていたが、後にこれを耕作する農民とその住居も含み、御厨と性格上近いものとなった。

薑御園は、平安時代の末期までに設定された



東田神明宮

伊勢神宮領である。「嘉承3年（1108）注文」、「永久3年（1115）宣旨」にその存在が記載されており、三河の中でも最も早く設定された一つである。

(2) 太蓮寺

太蓮寺は、小鷹野の屏風岩のふもとにあった真言宗のお寺を、文安3年（1446）に浄土宗に改め、今の場所に移したものである。寺伝によれば昔、屏風岩のふもとにいた隠者の



太蓮寺 十王堂

住まいに、聖徳太子がお出ましの時に、一夜の宿となったそうである。隠者は僧となり、住まいを寺とし、太子山勝鬘院太蓮

寺と名づけ、自らは勝鬘といい、太子の像を刻んで本尊とした。後に阿弥陀如来像を得、これを本尊にした。

境内の十王堂は、元瓦町善明寺にあったものを、同寺廃滅後の大正9年に移転したもので、享保2年(1717)

の建築といわれ、なかには十王尊彩色木像が安置してある。このお堂は、閻魔堂とも呼ばれ



太蓮寺 十王尊彩色木像

ているが、壇上右手には三十三観音木像もまつられている。

豊橋空襲で焼失した本堂は、昭和42年(1967)に落慶し、盛大に入仏式が行われた。現在の本堂は、鉄筋コンクリート造りの建物である。本堂内陣左手壇上には、聖徳太子、弘法大師像を安置している。また、同54年(1979)には、庫裏が新築された。

元禄元年(1688)に建てられた山門は、昭和20年の豊橋空襲をまぬがれ、当時の姿を最近まで残していたが、平成8年に建て替えられた。



現在の太蓮寺山門

太蓮寺は、江戸時代寺子屋を開いて、郷民を教え、明治17年(1884)法地に転格して悟真寺の特遇末寺となるが、昭和22年(1947)から浄土宗総本山知恩院の直末となった。

戦時中、仏具や什器一切を供出し、豊橋空襲で山門・十王堂・観音堂のみを残して、焼失した。また、農地法により耕地三反歩を失った。現在の境内地は約九百坪であり、檀家数は350戸である。戦後直ちに復興を計画し、昭和22年には本堂を建て、25年には墓地を整理し、同26年には、境内に園舎を新築し、同27年7月より昭和保育園を開園した。

太蓮寺には、昔話「おゆみ橋」のお弓の墓や「仏泥棒」の三十三観音が今も残っている。

(3) 二連木城と戸田氏・大口喜六



二連木城は、室町時代も戦国の世に入った明応2年(1493)に田原城主戸田弾正宗光により築かれた。この地に宗光が築城した理由については、北方への勢力の拡張を図って、その頃三河に勢力を伸ばしてきていた今川氏親の

船形山城に対抗するため築いたといわれている。戦国争乱の中で、二連木城は今川・松平(徳川)・牧野・戸田の諸勢力の攻防の渦中に巻き込まれ、波乱の変遷をたどる。

二連木城は、鎌倉街道と東海道の間位置し、江戸時代に吉田城下に宿駅が形成されるまでの漸移地点に立地していたのである。

武田氏が遠江から吉田に攻めてきたときも家康の軍と仁連木で出会い、また天正3年(1575)5月の武田勝頼の三河侵入の時も、



二連木城跡の萩

仁連木を中心として戦いが行われた。当時の城主戸田康長もこの戦いで活躍したが、天正18年(1590)家康が江戸に移るとともに、家康に従って武蔵国深谷一万石の城主となっ

た。また、池田輝政が吉田城主となったことで、二連木城は廃城となった。

二連木城跡の東側の近くにある稲荷神社は、古城稲荷と呼ばれ、二連木城主の守り神として建てられた神社といわれている。

公園には、豊橋町長・初代豊橋市長・衆議院議員を歴任し、郷土史家として名高い大口喜六(1870-1957)が、「二連木城跡」の碑を本丸土塁上に建て、晩年をここで過ごした。



現在、大口公園の中には、二連木城跡の石碑、東部老人福祉センターがあり、梅林や秋の七草園などもあり、季節にはそれらを楽しむこともできる。

(4) 全久院と戸田宗光

全久院は、二連木城主戸田憲光が亡き父宗光の追善供養のために建てた寺である。宗光は二連木城を築いて、牧野古白と戦った武将であり法名を「全久」と称したことから、この寺の名がついたといわれている。創立年次は諸説あるが、通常永正11年(1514)とされている。



全久院の全景

初代の住職には、当時新城にいた光国舜玉和尚が招かれた。舜玉は全久院を拠点として各地に寺院を開き、教を広めていった。

天正18年(1590)以後、戸田家は武蔵、上

野、下総、常陸と関東にも全久院を建てた。元和3年(1617)、戸田家は信州(長野県)松本へ移った。以降二百十年間、松本の全久院は戸田家祖先代々の菩提寺として篤く保護され、三六石七斗七升の朱印領を受けて勢力を誇っていた。

しかし、明治に入って保護者であった戸田光則が水戸学に心を預け、神道に改宗してしまった。そのため、松本の全久院は廃寺となり、広大な寺領も没収となってしまった。この時、現在重要文化財となっている三点をはじめ、いくつかの宝物、書類などが末寺とともに豊橋全久院に受け継がれた。これにより、豊橋全久院は一門全てをあわせると90余か寺



全久院 三十三観音像

にもなる末寺を持つに至ったのである。当時の住職義堅和尚は寺を一般の人々に開放し、寺領の払い下げを受けて勢力の回復をはかり、この危機を脱した。以後、人々の篤い信仰を受けて今日に至っている。

全久院には、「羅漢供養式橋本残巻」一卷、「宝慶記」一卷、「正法眼蔵」一帖の三点が昭和24年(1949)、国の重要文化財に指定された。いずれも、曹洞宗の開祖道元禅師と弟子懐奘の直筆で墨跡あざやかな価値の高いものである。

(5) 臨濟寺と小笠原家・山田宗徧

臨濟寺の歴史は江戸時代初期に始まる。吉田藩主小笠原忠知が豊後国(大分県)にいた時、亡父秀政を偲ぶため宗玄寺という寺を建てた。この宗玄寺は、忠知が豊後杵築から吉田に国替えとなる時、いっしょに吉田に移された。そして、寛文4年(1664)忠知の子に

よって現在の地に移され、寺号も萬年山臨濟寺と改められた。

当寺が吉田城主小笠原家の菩提寺であることから、小笠原家寄進によるものや忠知に招かれ



萬年山臨濟寺参道の石柱

た茶匠山田宗偏にゆかりのあるものが多く残されている。茶道宗偏流の始祖山田宗偏は、忠知に招かれて吉田に在住すること40年間、



宗偏庭入り口

茶の道を広く人々の間に伝えた人物である。宗偏の造った枯山水の名園は、訪れる者を風流な趣にひたさせてくれる。この枯山水の庭園は、本宮山・石巻山・吉祥山の山々を背景

に取り入れ、その空間に豊川を配置して、竹林の庭園へ流れ込むようにした雄大な庭である。

以降臨濟寺は、寺領百石を与えられ、小笠原家の菩提寺として勢力を誇示した。

しかし、明治初期に起こった廃仏毀釈運動に巻き込まれ、山門・庫裏・玄関を残してすべての建物が破壊されてしまった。昭和3年(1928)になって本堂・書院などが新築されたが、昭和20年の豊橋空襲により、わずか山門と弘法堂だけを残して再び焼失してしまった。

このようなたび重なる受難にもめげず、昭和25年(1950)、待望の庫裏がまず新築され、以後、本堂・開山堂が再建され、庭園の復旧、茶室の建築とつぎつぎに意欲的な復旧が続けられ、今日にいたっている。

毎年8月下旬、恒例の行事として虫干しを兼ねた寺宝展が行われ、多くの人々の展覧に供されている。忠知筆



臨濟寺 本堂

「竹に虎」、宗偏作花入「黒塚」をはじめ、絵画などが所狭しと並べられ、古の風雅にひたらせてくれる。

(6) 伝承や伝説

①おゆみ橋

牛川村のあるお金持ちの農家に、おゆみという美しい娘がいた。父親は、おゆみをとともかわいがり、娘のいうことは何でも聞いてやった。ある日、おゆみが、

「お父さん、わたし、三味線が習いたいんですが……。」

というと、ここにこしながら父親が、

「ああ、いいよ。瓦町にいいお師匠さんがいるそうだから、さっそくお願いしてみよう。」

と言って、すぐにお師匠さんにたのんでくれた。



次の日から、おゆみは、お師匠さんについて三味線を習った。お稽古を続けているうちに、いつしか二人はお互いにとても好きになってしまった。

お師匠さんの住む瓦町とおゆみの住む牛川村の間には、朝倉川が流れていた。橋はかけられていないので、大雨が降ると川の水が増え、渡ることができなくなった。

おゆみは、毎日、お師匠さんに会いたかつ

たので、

「急いで朝倉川に橋をかけておくれ」

と使用人に命令した。できた橋は、とても粗末なものだった。けれども、それからは、いつでも二人は会うことができるようになった。

おゆみがお師匠さんをとても好きなことを知った父親は、かわいい娘のことを考え、三味線のお稽古をやめさせようと思った。

ある晩のことだ。

「おゆみ。三味線が
とても上手になった
ようだから、もう、

お稽古をやめなさい」と父親が言うと、

「いやです。お稽古を続けさせてください。お願いします。

お父さん」

と、おゆみは泣きながらたのんだ。しかし、父親は、聞き入れてくれなかった。

お師匠さんに会えなくなり、おゆみは、とても悲しい毎日を過ごすことになった。お師匠さんも美しいおゆみの顔を見ることができなくなり、毎日が寂しくて、寂しくてたまらなかった。

ある激しい大雨の降った次の日、悲しみのあまり、おゆみは、家の井戸に身を投げて死んでしまった。同じ頃、お師匠さんも水死体となって朝倉川から見つかった。おゆみに会いたくて、大雨の中を橋を渡ろうとして、誤って足を滑らしたのか、悲しみのあまり、川に身を投げたのかはわからなかった。

二人の死は、人々の涙を誘った。その夜から、一つの人魂が橋を渡って牛川へと通い、帰りには二つの人魂が橋まで来て、そこで南と北に別れて飛んでいくようになったそうだ。

朝倉川には、いくつかの橋がかかっている。おゆみ橋は、県道にかかる「御園橋」の少し



下流にある橋だ。今は、川の幅も広くなり、橋もコンクリートに変わり、昔の様子とはずいぶん変わってしまった。しかし、おゆみ橋の伝説は、いつまでも人々の間に語り伝えられていくことだろう。

おゆみの墓は、太蓮寺にある。

② 仏泥棒

昔、とても信心深い男がいた。「毎日、自分の家で観音様がおがめたらなあ」と思っていた。ある日、太蓮寺の和尚さんが隣の町へ用事で出かけることになった。男は、こっそり寺に忍び込んだ。「しめしめ。小坊主たちはよく眠っているぞ」男は、お堂に入っていた。そこには、優

しい光を放っている三十三観音と十王様があった。じっと観音様を見ていた男は、ふとところから風呂敷を取り出し、三十三観音をそとつん



だ。「これで、毎日おらの家で拝めるぞ」と男は、ほくほく顔で観音様を背負って家へと急いだ。しばらくすると、観音様が少し重たくなってきた。「はて、気のせいかな、観音様が少し重たくなってきたぞ。疲れてきたのかな」と不思議に思いながらも休まずに歩いていった。

ところが、朝倉川のたもとまで来る頃には、重くて重くてもう一歩も歩けなくなってしまった。「今日は、これ以上運べそうもないな。仕方がない。明日の朝早く取りに来よう」と観音様を背中からおろし、朝倉川のたもとにおいて帰っていった。しばらくすると、そこに一人のお百姓が通りかかった。「もし、お百姓さん。お百姓さん。私は太蓮寺の三十三観音です。どうか、寺まで連れて行ってくだ

さい」という声が聞こえてきた。「はて、どこから聞こえてくるのだろうか」と不思議そうに辺りを見回すと、毎日拝みに行っている太蓮寺の観音様が、横たわっているのではないかとお百姓は急いで観音様を寺へ持って行った。



その頃、寺では、観音様がなくなったというので、大騒ぎをしていた。ちょうどその時、そこへお百姓が観音様を届けてくれたので、和尚さんたちはひと安心した。

和尚さんたちは、「また盗みにくるかもしれない」と考え、翌朝、朝倉川のたもとに隠れ、男を捕まえることにした。案の定、男は朝早くやってきた。和尚たちはすぐに男を捕まえた。そして、男は和尚さんに謝り、和尚さんもその男を許した。

その後、男は、観音様を拝みに毎日朝早くお寺に来るようになった。

③竜の鱗

新城市の大洞山泉龍寺には、竜の鱗の伝説があり、豊橋市東郷町の全久院には、今日でもその竜の鱗と称するものが寺宝として残っている。



いつの頃か、物憂い春の一夜、和尚の部屋へ突然目の覚めるような美女が現われ、悟りの道を教えてくれないかと願った。和尚はそれを快く受け、やさしく女をなぐさめた。

女は、それから一か月余り、毎夜和尚を訪れた。

ある日、「そなたは定めし魔性のものであろう。隠さず明かしてくださらぬか。」と和尚は女に尋ねた。女は、はらはらと涙を流してしばらく悲しくうなだれていたが、やがて青ざめた顔を上げ、「私は、八名郡一鍬田(新城市)のカイクラ淵に住む竜です。お情けによって、やっと悟りの道が開けました。」と、厚く礼を述べた。和尚は、女の身体をどことなく不自由になるのを見て、経文を唱えながら静かに背をなでてやった。

間もなく車軸のような豪雨となった。女は、竜に姿を変えて、雲を呼んで、カイクラ淵へと立ち去った。そして、その後の和尚の部屋に



は、黄金色の鱗がさんぜんと落ち散っていたと伝えられている。この鱗が、日照り続きの時に祈る雨乞いの御神体である。

年表（東田校区・市）

時代		東田校区とその周辺のできごと	日本・豊橋周辺のできごと
国の始まり	／大和	・牛川原人 ・東田古墳 ・豊橋地方、「穂国」とよばれる ・「穂国」と「御川国」が合併して「三河国」ができる。 702（大宝2） 持統上皇、三河を行幸する。	・狩りや漁のくらし ・米作りが大陸から伝わる。 ・大和朝廷が国土を統一する。 645（大化元）大化の改新
		貴族の時代	奈良 715（霊亀元）三河国地震 741（天平13）三河国分寺、国分尼寺ができる。
武士の時代	鎌倉	1196（建久7）伊良湖で東大寺再建瓦を焼く。 ・「海道記」や「東関紀行」などに三河を通った鎌倉街道のようすが描かれる。 1238（暦仁元）足利義氏が三河守護となる。	1192（建久3）源頼朝が鎌倉に幕府を開く。
	室町	1446（文安3）太蓮寺が建てられる。 1493（明応2）戸田宗光、二連木城を築く。 ・この頃、舟形山城をめぐる、今川氏と戸田氏の合戦が行われる。 1505（永正2）牧野古白、今橋城（後の吉田城）を築く。 1514（永正11）全久院が建てられる。 1541（天文10）戸田宣光、再び二連木城を築く。	1338（延元3）足利尊氏が京都に幕府を開く。 1467（応仁元）応仁の乱
	安土桃山	1590（天正18）池田輝政が吉田城主となる。 三河検地が行われる。二連木城、廃城になる。	1590（天正18）豊臣秀吉が全国を統一する。 1600（慶長5）関ヶ原の戦い
	江戸	1645（正保2）小笠原老岐守忠知が吉田城主となる。 1664（寛文4）臨濟寺が建てられる。 1752（宝暦2）吉田藩の藩校「時習館」が開かれる。	1603（慶長8）徳川家康が江戸に幕府を開く。 1853（嘉永6）ペリーが浦賀に来る。
新しい時代	明治	1869（明治2）吉田藩を豊橋藩と改める。 1871（明治4）豊橋藩を豊橋県と改め、のち額田県に含まれる。 1872（明治5）額田県は愛知県となる。 1874（明治7）第10中学区第5番小学勸善分校を開校する。 1875（明治8）第10中学区第5番小学仁連木学校となる。 1876（明治9）第10中学区第18番小学仁連木学校と改称する。 1878（明治11）仁連木村、瓦町村が合併して東田村となる。 1880（明治13）渥美郡第12番小学仁連木学校と改称する。 1882（明治15）東田村が、仁連木村と瓦町村に分村する。 1884（明治17）渥美郡第11学区小学仁連木学校と改称する。 1887（明治20）渥美郡尋常小学岩田学校の分校となる。 1888（明治21）豊橋駅が開業する。牟呂用水が通る。 1889（明治22）仁連木・瓦町・岩崎・岩田・飯村・三ノ輪の6村が合併して豊岡村となる。	1868（明治元）明治維新 1872（明治5）「学制」発布 1875（明治8）学令を6歳より14歳までとする。 1877（明治10）西南の役が起こる。 1879（明治12）「学制」を廃し、「教育令」を制定する。 1881（明治14）教育令の改正により、小学を初等・中等・高等に分ける。 1885（明治18）教育令が再改正される。 1886（明治19）教育令が廃止され、「小学校令」が制定される。 1889（明治22）大日本帝国憲法発布される。 1890（明治23）「小学校令」を改正する。「教育に関する勅語」を発布する。
		1892（明治25）校舎を東田字西前山に新築・移転する。 1893（明治26）渥美郡豊岡村立豊岡第二尋常小学校となる。	1893（明治26）「君が代」を国家に制定する。 1894（明治27）日清戦争が起こる。 1900（明治33）「小学校令」が再改正され、義務教育年限が4年となる。
		1906（明治39）豊橋町は花田村・豊岡村と合併して市制をしく。 1907（明治40）旧豊岡尋常小学校の校舎を用いて、豊橋市立東田尋常小学校が開校する。 1908（明治41）陸軍第15師団がおかれる。市内に電話が通じる。 1910（明治43）遊廓、瓦町東田に移転する。	1904（明治37）日露戦争が起こる。 1907（明治40）義務教育年限が6年となる。

時代	東田校区とその周辺のできごと	日本・豊橋周辺のできごと
大正	1914 (大正3) 市道東田線が完成する。 1918 (大正7) 市内に米騒動がおこる。 1925 (大正14) 市電が終点の東田駅まで通る。 豊橋市立商業学校が、現東田小学校の地に開校する。 陸軍第15師団が廃止される。 1926 (大正15) 尋常小学校に青年訓練所が併置される。	1914 (大正3) 第1次世界大戦に参戦する。 1923 (大正12) 関東大震災が起きる。
	1927 (昭和2) 東田土地区画整理事業がはじまる。(～昭和17) 1929 (昭和4) 東部土地区画整理事業がはじまる。(～昭和15) 東田尋常小学校が東京神宮全国少年野球大会で優勝する。 1930 (昭和5) 上水道が通る。 1933 (昭和8) 仁連木土地区画整理事業がはじまる。(～昭和21) 1935 (昭和10) 尋常小学校に各種補習学校及び青年訓練所を改廃併合して、市立青年学校を併設する。 1940 (昭和15) 東田球場、陸上競技場ができる。 東田町の町区域が変更される。 1941 (昭和16) 東田尋常小学校が、豊橋市立東田国民学校と改称する。 1944 (昭和19) 市内中等学校生徒の学徒動員が始まる。 1945 (昭和20) 市内中等学校低学年、小学校の学徒動員が始まる。 豊橋が空襲をうけ、市街の70%が焼ける。東田国民学校の校舎が全焼する。 校区内の神社・寺院・幼稚園等の臨時学舎で授業を開始する。 1946 (昭和21) 東田国民学校が工兵隊仮校舎・女子商業校舎で授業を再開する。9月に工兵隊仮校舎に集結する。 1947 (昭和22) 西郷、東田中郷、東郷、東雲、上地、仁連木、東田と改称する。 「学校教育法」により、豊橋市立東田小学校と改称する。 1948 (昭和23) 東田小学校が旧女子商業学校に移転する。東田PTAが発足する。 1949 (昭和24) 陸上競技場を改装し、競輪場ができる。 1950 (昭和25) 市電が今の場所を通るようになる。 1952 (昭和27) 東田小学校が分離し、旭小学校が創設され、新校区が定められる。同時に、旧市立商業学校跡(現在地)に新築移転する。 1953 (昭和28) 13号台風で大きな被害を受ける。 1955 (昭和30) 小学校でA型完全給食が実施される。 1958 (昭和33) 子ども造形パラダイスが始まる。 1959 (昭和34) 伊勢湾台風で大きな被害を受ける。 1960 (昭和35) 栄町、東田仲の町を区画整理する。 1963 (昭和38) 豊川用水が通水する。 1966 (昭和41) 東部老人福祉センターができる。 朝丘町・宮下町が岩田校区より編入する。 1967 (昭和42) 朝丘町、宮下町を区画整理する。 北臨済寺横断歩道橋が完成する。 1968 (昭和43) 東田横断歩道橋が完成する。 1969 (昭和44) 東田小学校に岩石園ができる。 1970 (昭和45) 市立豊橋高等学校ができる。 1971 (昭和46) 東田小学校の講堂が体育館に改装される。 1974 (昭和49) 東田小学校創立百年記念式典が行われる。 東田中郷土地区画整理事業がはじまる(～昭和51) 1975 (昭和50) 御園町を設定する。 1980 (昭和55) 東田校区市民館ができる。 1982 (昭和57) 北部地区体育館開館・市内電車岩田運動公園まで延長される。	1931 (昭和6) 満州事変が始まる。 1937 (昭和12) 日中戦争が始まる。 1939 (昭和14) 青年学校の義務制が施行される。 1940 (昭和15) 旧市内7青年学校を統合し、豊橋青年学校を設立する。 1941 (昭和16) 太平洋戦争が始まる。 「小学校令」を改正し、「国民学校令」が公布・施行される。 1944 (昭和19) 女子挺身隊の出動始まる。 1945 (昭和20) 豊川海軍工廠が空襲される。 広島・長崎に原爆が投下される。太平洋戦争終戦 ポツダム宣言を受ける。 1947 (昭和22) 愛知大学が開校する。 「学校教育法」「教育基本法」が公布される。義務教育の6・3制により、新制中学校が開校する。 日本国憲法が実施される。 1948 (昭和23) 日本国憲法が公布される。 1950 (昭和25) 朝鮮戦争が起こる。 1951 (昭和26) 日米講和条約に調印する。 1953 (昭和28) 日米安全保障条約に調印する。 1956 (昭和31) 国際連合に加わる。 1957 (昭和32) ソ連が人工衛星の打ち上げに成功する。 1962 (昭和37) 義務教育の教科書が無償となる。 1963 (昭和38) 義務教育の学級定員が45名以下となる。 1964 (昭和39) 東海道新幹線が開通する。 東京オリンピックが開かれる。 1969 (昭和44) 人類初の月着陸に成功する。(アメリカ アポロ11号) 1970 (昭和45) 大阪で万国博覧会が開かれる。 1972 (昭和47) 沖縄が日本に返還される。 1973 (昭和48) 石油ショックが起きる。 1976 (昭和51) ロッキード事件 1978 (昭和53) 日中平和友好条約調印
昭和		

時代	東田校区とその周辺のできごと	日本・豊橋周辺のできごと
昭和	1983 (昭和58) 市民館ナイター照明が設置される。 1986 (昭和61) 市制80周年を迎える。 1988 (昭和63) 自然史博物館が開館する。	1989 (昭和64) 昭和天皇崩御する。
平成	1989 (平成元) 市総合体育館が開館する。 1991 (平成3) 朝倉川改修工事が始まる。 2003 (平成15) 小柴教授が東田小学校に来校する。(6月15日)	1989 (平成元) 元号が平成に変わる。 1995 (平成7) 阪神・淡路大震災が起きる。 2002 (平成14) 小柴教授がノーベル賞を受賞する。

参 考 文 献

- | | |
|--------------------------------|--|
| 豊橋市史（豊橋市史編集委員会） | 豊商80年史（県立豊橋商業高等学校） |
| 中消防署 16年度観測データ | 豊橋小学校区別統計資料 |
| 豊橋市国税調査 | 角川日本地名大辞典 |
| 豊橋市市制五十年史（豊橋市政五十年史編集委員会） | 豊橋の史跡と文化財（豊橋市教育委員会） |
| 豊橋めぐり（吉川利明） | 豊橋市河川事業概要（豊橋市建設部河川課） |
| 焼け跡に立つ虹 戦争体験の記録（愛知県教員組合） | 桜丘学園創立八十周年記念誌 |
| 伊奈彦定画集「今昔市電のある風景」 | 三河国古蹟考（羽田野敬雄） |
| 茶道具名品展「山田宗偏とその周辺」
（豊橋美術博物館） | 郷土史講座「吉田宿にまつわる史話・伝説・伝承」
（吉田の宿を考える会） |
| 二川中学校郷土クラブ調査資料 | 豊橋の歴史（豊橋市） |
| 百年のあゆみ 晨（東田小学校） | 創立120周年記念20年誌（東田小学校） |
| あずまだ（東田小学校副読本） | 字一筆限地図帳 |
| 国土地理院発行地形図 | 市内線路線図・利用者等（豊橋鉄道） |
| 土地区画整理事業の概要（豊橋市） | 豊橋けいりん概要（豊橋市） |
| 豊橋整地事業誌（豊橋整地協会） | |

編 集 後 記

豊橋市が発足して100年、その間東田校区も着実に発展してまいりました。市制100周年記念事業として「東田校区誌」を編集し、発刊することになりました。東田校区は、古代から人が住み、古墳、城址、社寺や庭園などの史跡があり、先人が築き上げた文化や歴史の足跡を見つけることができます。枚数の都合でそれらのすべてを網羅できませんでしたが、故きを温ねる指針としていただければ幸いです。最後に市役所をはじめ、関係機関より貴重な写真や資料の提供を頂きましたことに対して衷心よりお礼申し上げます。

東田校区史編集委員会

編集委員名

委員長	阿部 富治				
副委員長	糸柳 弘	丸地 和夫	横田 佳昭	戸田 守彦	
委員	櫻井 理一	富山 三男	小池 悦子	山下 静夫	伊藤 篤史
市サポーター	蔵地 宏美	朝川順二郎			
顧問	藤田 興治				

協力者・協力機関

豊橋市役所 東田神明宮 太蓮寺・昭和保育園 臨濟寺・恵日幼稚園 全久院
豊橋鉄道株式会社 東田校区市民館 仁連木老人福祉センター 豊橋市立東田小学校
豊橋市立豊橋高等学校 愛知県立豊橋商業高等学校 私立桜丘高等学校 中消防署

校区のあゆみ 東田

平成18年12月25日発行
編 集 東田校区総代会
東田校区史編集委員会
発 行 豊橋市総代会
印 刷 齋 ぎょうせい





2006年
市制100周年
100th Anniversary Toyohashi City

つながり ひろがる 未来 豊橋